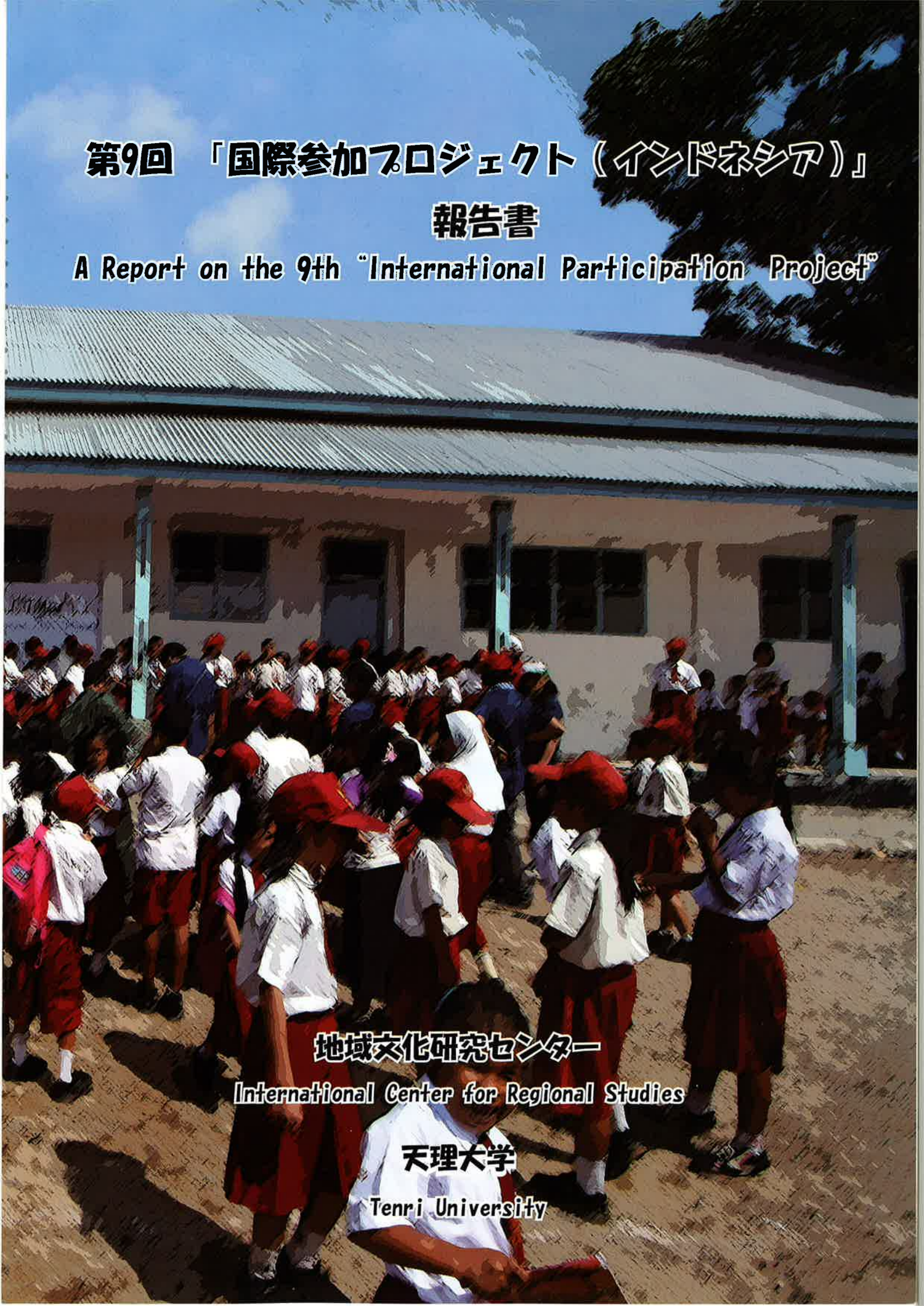
第9回 「国際参加プロジェクト（インドネシア）」

報告書

A Report on the 9th "International Participation Project"



地域文化研究センター

International Center for Regional Studies

天理大学

Tenri University

第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」報告書刊行に寄せて

学長　橋本　武人

天理大学の「国際参加プロジェクト」は、建学の精神の一環として唱導する「他者への献身」を国際的なスケールで実践し、よって本学の教育目標として掲げる宗教性と国際性を同時に涵養する教育課程である。

本プロジェクトは、2001年大震災に見舞われたインド西部地区への災害救援活動として始められたが、いわゆる義援金や救援物資を運び届ける類いの活動ではない。最初のインドでは貯水のための河川堰建設やボンガ（土嚢ハウス）の建築など、現地の人びとが自立復興へ向けて必要とするものを、ともに汗して建設するところに特色をもたせたもので、この基本姿勢は終始一貫している。

このインドでの活動が３年間続けられた後、2004年にはフィリピンへ、2005年には中華人民共和国へと活動の舞台を移して実施された。2006年は、地震と津波により大きな被害を受けたインドネシアのニアス島を中心に展開されるとともに、「フィリピン・プロジェクト06」と称する別動隊の活動がつけ加えられた。2007年は、いずれも２年続きの活動になり、インドネシアを第７回、フィリピンを第８回と数えている。

したがって、この夏、３年続きになるインドネシアで実施された活動は、第９回「国際参加プロジェクト」ということになり、本書はその活動報告書である。今回は学生、教員ら25名が参加、２年前校舎を寄贈したモアウォ小学校では、ドッジボールや音楽の指導を行ない、授業発表会でその成果が発表された。なお、インドネシアとの国交50周年の本年、本プロジェクトは日本政府から「日本インドネシア友好年事業」と認められている。

言葉も違えば習慣も異なる異文化圏の人びととの共同作業、ホームステイ先の家族との直接的な交わりを通して、学生たちは国際性を養う上で多くのことを学び、現地の人びとに喜んでいただく「他者への献身」を通して、人をたすける心、宗教的な心性の涵養も可能になる。また、貧しくとも純真で屈託のない子どもたちとの交わりは、何かにつけて恵まれている自己自身を省みる機会となり、物質文明が置き去りにしてきた心の豊かさを取り戻す契機ともなる。

今はまだ渡航先も限られ、参加人員数にも制限があるが、おいおい活動の範囲を世界の各地に広げて、一人でも多くの学生諸君が参加できるようにしていきたい。終わりに、この度の「国際参加プロジェクト」の計画実施に携わった教職員、絶大なご支援ご協力を賜った関係機関各位のご厚情に対して、深甚なる敬意と謝意を表します。

3年目のインドネシア・ニアス島で学んだこと

地域文化研究センター長　住原　則也

2006年8月にスマトラ島とインド洋に浮かぶ小さなニアス島に引率スタッフの一員として初めて学生諸君と出かけてから、3年目の夏となりました。今回も参加学生たちの熱心さやたくましさに改めて感じるものがありました。毎年、学内や後援会をはじめとした多くの方々からの変わらぬご協力により成り立っていること、ここに感謝いたしたいと思います。

3年目を迎えても私自身は現地語もままならず、地理も、ホテル・オトモシ（現地活動本部である小さなホテル）とモアウォ小学校（活動拠点であり、天理大学から校舎を寄贈した現地小学校）の間の狭い幹線道路程度しか把握できていません。動きの迅速な他の教員スタッフのおかげで私も参加できているというのが正直なところです。今回は、日本からのスタッフに加えて、北スマトラ大学で日本語を学ぶインドネシア人学生が5人もスタッフとして参加してくれたことで、天理の学生と現地小学生とのコミュニケーションの質と量が拡大したことが特筆すべきことと思いました。彼らにとっても、初めてのニアス島であり、ボランティア活動をしながら日本語の勉強ができ、有意義で楽しかったようです。また毎年、スマトラ島メダン市の在メダン日本国総領事館では、城田総領事をはじめとして館員の方々が公館であたたかく迎えてくださいますが、年を重ねる毎に親密さが増してくるような実感もあります。このように、天理大学とニアス島の小学校、という点と点のつながりから、少しずつ面のつながりへと幅が広がっていることが感じられるようになった年でした。

さらに、今年は、「活動内容と効果」という視点から、目を開かされた年でもありました。といいますのも、今年の主な活動はドッジボールと音楽を教えるという内容でしたが、昨年（2007年）はもっぱら「防災教育・訓練」を行ないました。津波や大地震にみまわれていながら、島では防災教育や避難訓練は行なわれていなかったからです。そこで昨年学生たちがその方面の活動に取り組んだわけですが、その時には現地の先生や父兄からも特別に感謝・評価の言葉を聞くことはほとんどなかったのが実情でした。ところが、2008年の今年、島に到着してみると、この1年間小さな地震が起きたときなど、子どもたちは学校でも家でもちゃんと教えられたように避難しているということが分かったのです。そして詳しく事情を聞いてみると、島では伝統的に天災などの話をすることは縁起の悪いことで、また起こるのではないかとタブー視される傾向があったというのです。そんな事情を知る由もない学生たちが、ドラえもんの着ぐるみなどをまとって、屈託なく明るく、劇仕立てで防災教育・訓練を行なったことが、図らずもそのようなタブーの伝統を自然に打ち崩すような効果があったようです。学校の先生からは、「地震の精神的後遺症（トラウマ）も和らいでいる」といったコメントもありました。

今年のスポーツや音楽の活動内容の「効果」もまた、同様に長期的な視点から見定めるべきものと思うようになった次第です。次回の訪問の楽しみの一つになっています。それが、押し付けではなく、自然に受け入れてもらえているかどうかの基準になるものと思えるからです。すぐに役立ち感謝されるというものではなくても、時間をかけて意義を感じてもらうことの大切さを学習できた今年でした。

「国際参加プロジェクト」の活動報告を受けて

後援会会長　諸井　英二

「自分は学費をアルバイトで工面しているので、このプロジェクトの参加費用が全額自己負担だったら後学期の授業料を払うめどが立たず、卒業できなかったかもしれない。後援会の補助金があったからこそ「国際参加プロジェクト」に参加でき、卒業のめども立ち、来年はドイツの平和村プロジェクトに参加することも決まりました。ありがとうございました。」

「国際参加プロジェクト」の報告会でまっ先に述べられた言葉でした。なんと素晴らしい言葉なのだろう。はたしてこの言葉にはどんな思いが込められているのだろうかと、私は彼女たちの報告を聞き進めました。

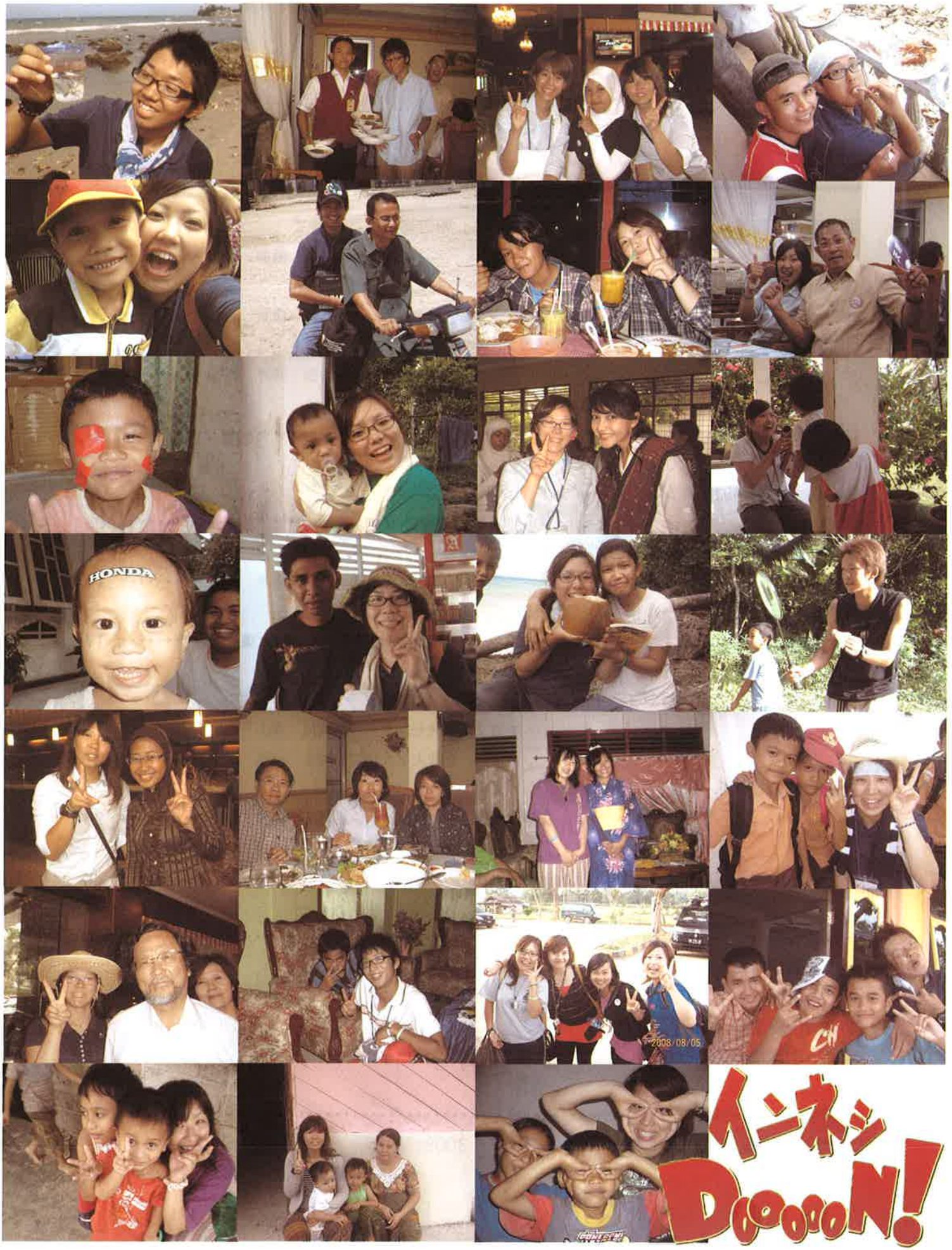
本年夏、彼女たちはインドネシアのニアス島という地域の小学校で、子どもたちにドッジボールや楽器の指導をしてきたそうです。そこでは当初考えていた楽器の指導プログラムがうまく機能しなかったので、急遽現場で指導プログラムを変更したとか、ドッジボール指導の場面でも、通訳を通すよりも直接目と表情を通じて指導したほうが効果的だったというように、様々な苦労を乗り越えての活動であったようです。そして、やっている時はわからなかったが、成果が上がったのを見てうれしかった。また、現地のホームステイ先で異文化にふれることで自らを向上させることができて、このプロジェクトに参加してうれしかったとの報告が続きました。

今日の高度に組織化された社会システムや援助プログラムでは、援助の成否に関わらず、システムやプログラムに忠実に動くことのみが要求されることがよくあります。このようなシステム中心主義とも言える風潮の中にあって、学生さんたちは支援される人を中心にすえ、自分たちのシステムやプログラムを改編してまで目的を達成し、その苦労を喜びにかえておられます。

このような態度こそ、「人をたすけてわが身たすかる」という、まさに本学建学の精神に合致したものであり、この「国際参加プロジェクト」自体が本学の教育理念に合致するものであることを確認させていただきました。

このプロジェクトに参加いただいた学生さんには、社会に出てからも本プロジェクトで体得した態度を忘れることなく人生を歩んでいただきますようお願いするとともに、みなさんが支援先の人びとから受け取られた喜びをお父様お母様はじめ、身近の方々にお伝えくださるようお願いして筆をおきます。

はじける笑顔


HONDA
2008/08/05
CH
インネシ
DooroN!

<目　次>

第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」報告書刊行に寄せて
学長　橋本　武人 ・・・・・・・・・ 01
３年目のインドネシア・ニアス島で学んだこと
地域文化研究センター長　住原　則也 ・・・・・・・・・ 02
「国際参加プロジェクト」の活動報告を受けて
後援会会長　諸井　英二 ・・・・・・・・・ 03

はじける笑顔 ・・ 04

第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」について
地域文化研究センター　講師　倉光　ミナ子 ・・・・・・・・・ 08
ニアス島での活動を振り返り、評価（私見）する
国際文化学部　教授　山本　春樹 ・・・・・・・・・ 14
スポーツ班　ドッジボール指導の活動報告
体育学部　准教授　深見　英一郎 ・・・・・・・・・ 17

天理大学「国際参加プロジェクト（インドネシア）」のプログラム化について
地域文化研究センター　准教授　澤山　利広
立教大学大学院　院生　高藤　洋子 ・・・・・・・・・ 21
2008年　ニアス・健康管理面から
天理高校第二部介護福祉科　看護師　椋野　和子 ・・・・・・・・・ 26

学生からの報告：ここから始まる Terima Kasih ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

～活動報告～ ・・ 30
１．事前研修
２．結団式
３．現地での活動
４．帰国後の活動報告

～感想文～ ・・ 43
「サオハグル　ニアス（ありがとう　ニアス）2008」
イスパニア語２年　石田　賢人 ・・・・・・・・・ 43

私のウルルン滞在記
欧米学科１年　井上　美優 ･････････ 44

指導することの難しさ
英米語２年　井元　傑 ･････････ 45

My Dream Comes True
ドイツ語４年　岡本　暁子 ･････････ 46

家族の輪
英米語２年　岡本　美和 ･････････ 47

自分らしさ
タイ語４年　笠木　和樹 ･････････ 48

人と人のつながり
ブラジルポルトガル語２年　北村　和恵 ･････････ 49

素敵すぎるインドネシア
ブラジルポルトガル語２年　児玉　佳鈴 ･････････ 50

ありがとうでいっぱい
ブラジルポルトガル語２年　後藤　美佐 ･････････ 51

A Simple Life
中国語４年　近藤　侑子 ･････････ 52

生きていると本気で感じた 12 日間
インドネシア語４年　新山　由記 ･････････ 53

Some Day......
アジア学科１年　武田　晃星 ･････････ 54

インドネシアの夏
ドイツ語２年　橘　優 ･････････ 54

人と出会う喜び
欧米学科１年　中辻　祐介 ･････････ 55

インドネシアと日本で見つけたもの
英米語２年　福田　隼 ･････････ 56

私の見た世界
ブラジルポルトガル語２年　堀崎　明子 ･････････ 57

世界を大きくしたニアス島での７日間
ブラジルポルトガル語２年　松村　千尋 ･････････ 58

伝えたかったこと、学んだこと
欧米学科１年　山口　大輝 ･････････ 59

～プロジェクト関連資料～ ･･ 60
・参加を呼びかけるパンフレット
・日本インドネシア友好年事業関連
・新聞記事等

第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」について

地域文化研究センター　講師　倉光　ミナ子

はじめに

天理大学「国際参加プロジェクト」は本学の建学の精神にもとづく「他者への献身」を、国際的な場で、実際に体を動かし経験するための実践的な教育プログラムである。プロジェクトでは、従来の海外における語学研修や異文化体験にとどまらず、互いにたすけ合う献身的行為を通し、文化・言語をこえて「人間とは何か」について学ぶ機会を学生に与えることを目標とすることで、学生の国際性と宗教性の涵養を目指している。

インドネシア共和国での「国際参加プロジェクト」は今年度で３年目となる。もともとインドネシアでのプロジェクトは 2004 年 12 月末に起こったスマトラ沖大津波に対する本学全体の支援活動の一部として始まり、展開してきた。主たる活動の地はインドネシア共和国北スマトラ州メダン市およびニアス島であり、特に 2006 年８月 29 日に本学が校舎を寄贈したニアス島のモアウォ小学校を拠点に活動を続けてきた。今年度も第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」として、2008 年７月 27 日～８月７日までの 12 日間、ニアス島を中心に活動した。ここでは、第９回のプロジェクトの内容とその成果について簡単に報告する。

計画と準備

第９回のプロジェクトを実施するにあたり、2008 年１月に国際文化学部アジア学科の山本春樹教授とともに事前調査を行なった。調査の目的はニアス島におけるこれまでの活動の成果とこれからの本学の活動に対する要望を調べること、またメダン市周辺で活動の展開ができるような機会がないかを調査することであった。後者の件に関しては、これまで同様在メダン日本国総領事館において、日本のＯＤＡの現場を学ぶのに適した訪問先、地元ＮＧＯの活動、そしてインドネシアに進出している日本企業の有無について相談に乗っていただいた。また、昨年から交流を続けている北スマトラ大学文学部日本文学・日本語学科も訪問し、今年度の交流のあり方について意見を交換した。ニアス島ではモアウォ小学校の教員の皆さんと PTA の皆さんに集まってもらい、これまでの活動の成果と天理大学への要望を尋ねた。ニアスの先生方からはさらなる物品の援助を求める声があがったが、こちらからは今後はソフト面の援助へ移行していくことを提案した。PTA の方々からは天理大学の学生を引き続き歓迎したいという嬉しい申し出があるとともに、こちらの学生が生活習慣の違いに戸惑わないようにきちんと研修をしてほしいという要望があった。

インドネシアの活動にはインドネシア語という言葉の壁がある。学生によっては初めての海外渡航になる子もいる。それでいて、学部の１年生から４年生まで参加可能なプロジェクト、さらにニアス島のニーズにあった国際協力が体験できるプロジェクトを企画するのは非常に難しい。昨年は防災教育とスポーツ・文化交流を行なう予定にしていたが、雨天であったことからスポーツ交流ができなかった。また、地域文化研究センターにおいて、天理大学の特徴としてのスポー

ツを生かした国際協力の可能性について模索され始めた時期でもあったので、ニアス側から「何かボールを使用した新しいスポーツを教えてほしい」という要望があったときに、日本の学生であれば誰でも小学生のときにやったことのあるドッジボールを選択することにした。ニアス島での話し合いでもそれは受け入れられ、あくまでも「遊びではなく教育として」、4～6年生にはドッジボールを教えるということでとりあえず合意に達した。一方、スポーツ指導だけでもよかったが、自分が学生のときスポーツが苦手であったことを顧みて、誰でもプロジェクトに参加できるように工夫したかった。また、モアウォ小学校の要望は全学年に何かをしてほしいというのが常であったために、初めは低学年を対象に、日本の昔話の紙芝居をすることを考えた。しかし、ニアス側から「何か新しい楽器を紹介してほしい」という要望があったのと、昨年の防災教育で紙芝居を作るのにとても時間を要したことから、ピアニカを利用した振りつきの歌を指導することにした。

帰国後、活動の主目的が「教育としてのスポーツ」になったので、体育学部に支援を求めたところ、幸いにも准教授の深見英一郎先生が学生の事前研修と現地活動の指導に参加してくださることになった。一方、音楽指導は天理小学校の校長先生と教頭先生のご協力を得られ、音楽の授業と合唱クラブの指導を見学できることになった。また、6月の出張時には、教育をある程度しっかりと行なうために、予定していたニアス文化の見学はとりやめ、ニアス島での日程のすべてをモアウォ小学校での活動にあてること、対象とする学年を1～4年生に限定すること、そして、最後に活動の成果を示す成果発表会を行なうことを決定した。

学生募集および事前研修

学生の募集は4月1日より本格的に開始した。今年は新たな試みとしてカラーの折込チラシ（60頁参照）を用意し、それを新入生も含めた全学生徒に配布した。さらに、これまでの活動がイメージできるようにスライドショーを作成し、受講人数の多い総合教育研究センターの先生方の初回の講義でプロジェクトの紹介をさせていただいた。このような募集活動の結果、4月2日の予備登録オリエンテーションには25名の学生が、4月14日の募集説明会には22名の学生が集まった。今年は、昨年の事前研修で時間が十分でなかったことを踏まえ、4月21日に募集を締め切った。書類審査と面接の結果、21名の応募に対し、男子学生8名、女子学生10名の計18名を参加学生として決定した。

事前研修は4月30日より毎週水曜日の午後4時半から行ない、渡航するための事務手続き、健康管理の仕方、インドネシアの概略や必要最低限のインドネシア語の習得などをする一方で、そのほとんどをいかにドッジボールを教えるのか、いかにピアニカと歌を教えるのかという教案作りに費やした。スポーツ指導については深見先生の報告が詳しいのでそちらを参照していただきたいが、音楽指導は特に指導者もない中で、天理小学校の合唱クラブの活動を見学させていただいた経験に基づいて、学生たち自身で教案を生み出していった。6月末までスタッフ側の意図がなかなか一定しなかったこともあり、作業は予想以上に遅れ、7月には学生のほとんどが毎日のように指導準備に追われていた。その頃になると、やっと日程にそった具体的な教案が作成され、当日誰が何をするのかといった自分のやるべき役割も少しずつ明確になっていった。また、私たちがニアス島を去った後にもドッジボールと音楽が続くように、山本先生と深見先生の多大なご協力に基づき、インドネシア語と日本語で書かれた教則本（61頁参照）も作成された。

■プロジェクト参加者一覧

スタッフ	住原　則也	地域文化研究センター長
	澤山　利広	地域文化研究センター　准教授
	倉光　ミナ子	地域文化研究センター　講師
	山本　春樹	国際文化学部　教授
	深見　英一郎	体育学部　准教授
	椋野　和子	天理高校第二部介護福祉科　看護師　センター共同研究員
	髙藤　洋子	立教大学大学院　院生　現地活動スタッフ
学生	石田　賢人	イスパニア語コース　２年
	井上　美優	ヨーロッパ・アメリカ学科　１年
	井元　傑	英米語コース　２年
	岡本　暁子	ドイツ語コース　４年 *
	岡本　美和	英米語コース　２年
	笠木　和樹	タイ語コース　４年 **
	北村　和恵	ブラジルポルトガル語コース　２年
	児玉　佳鈴	ブラジルポルトガル語コース　２年
	後藤　美佐	ブラジルポルトガル語コース　２年
	近藤　侑子	中国語コース　４年 *
	新山　由記	インドネシア語コース　４年 *
	武田　晃星	アジア学科　１年
	橘　優	ドイツ語コース　２年
	中辻　祐介	ヨーロッパ・アメリカ学科　１年
	福田　隼	英米語コース　２年
	堀崎　明子	ブラジルポルトガル語コース　２年
	松村　千尋	ブラジルポルトガル語コース　２年
	山口　大輝	ヨーロッパ・アメリカ学科　１年

** 学生リーダー　* リーダー補佐団

事前研修では、毎年、学生のリーダーを選出する。これは一見簡単に見えるが、実は大変難しい。何にせよ、一度も会ったことのない学生が集まり、数回の研修で自分たちのリーダーを選ぶのである。これまでの経験から、私自身は個人的に何でもスタッフの指示待ちで真面目ではあるがおとなしい人物より、むしろ少しやんちゃだが、いつの間にか仲間の中心にいるような明るい人物や慣れない地の活動に弱っている仲間の様子に気づき、元気に励ますことのできる人物の方がリーダーに適していると考えるようになった。概して、リーダーは大変な仕事である。仲間と騒ぎたくてもそれは許されず、突然グループを代表した挨拶をしなければならないこともある。

その大変さが分かっているので自ら立候補してくれると嬉しいが、誰かを指名して頼むのは本当に心苦しい。例年では、宿泊研修をした後でリーダーが選出されていたが、今年は宿泊研修も無く、少々学生間の交流が少ないようにも思われたので、心苦しくもこちらからリーダーを指名した。その代わり、負担が１人にかかり過ぎないように、４年生全員にリーダーを補佐するものとして仕事を分配した。結果として、この方法は上手く働き、今年もすばらしいチームワークをみることができた。

事前研修の締めくくりとして、７月23日午後６時から学長先生にご臨席を賜り、結団式を敢行した。今年の事前研修では学生たちにとっていろいろと悩み思うところがあったらしく、結団式では抱負を語るというよりも、むしろ今までの研修を反省し、現地活動へと決意を新たにするものになった。最後に、プロジェクトの成功を祈願し天理教本殿を参拝し、事前研修は終了した。

現地の活動について

７月27日に関西国際空港からシンガポールを経由して、活動の地となるインドネシア共和国北スマトラ州メダン市に到着した。同市ではあくる日の28日に、日本のODAの現場として、ヌル・アディア小学校を訪問した。小学校の前の道についたとたん、学校から鼓笛の音が流れてきて、学校までの道端にはそれぞれの国旗をもった子どもたちが熱烈に歓迎してくれた。初めて出会うインドネシアの子どもたちに感動しながらも、学生たちはそれぞれの班に分かれて、自分たちの準備してきたスポーツと音楽の指導がうまくいくのかどうかを試していた。ヌル・アディア小学校の活動後は、その現場を紹介してくださった在メダン日本国総領事館の方々に挨拶するために、総領事公邸を表敬訪問した。公邸では昼食をご馳走になりながら、例年私たちの活動を温かく応援し、何かあったときにはご助力いただいている、城田総領事や青山領事をはじめとする総領事館の方々と短い時間ながらも有意義な交流のときを過ごすことができた。

７月29日、活動の本拠地であるニアス島へ向けて出発した。モアウォ小学校で授業をするのは全部で４日間、小学校側からは音楽指導の担当の先生を２名、スポーツ指導の担当の先生を２名決めていただき、一緒に指導をすることになっていた。お互いに初めての経験であったので、当初は良くわからなかったのか、こちらの予想していたような協力を得られず、戸惑う場面もあった。しかし、音楽指導の先生方はそれぞれにピアニカを持ち帰って練習したり、スポーツ指導の先生もスポーツをする服装で現れたりと、できる限り一緒に授業をしようとする姿勢をみせてくれた。学生たちも子どもたち相手に予想していなかったことが次から次へと起きていたようだが、それぞれに話し合い、試行錯誤を繰り返しながら、最後の日にはどちらもそれなりに成果がみえるようになっていた。８月４日の授業の成果発表会では、時間はかかったがスポーツ指導では予定していたトーナメント形式の試合をすることができ、音楽指導では子どもたちがモアウォ小学校の先生たちが吹くピアニカの音にあわせて、『大きな栗の木の下で』と『幸せなら手をたたこう』の歌を見事に披露した。もちろん様々な問題や課題は残っているが、予定していたことをすべて無事にやり終えたので、プロジェクトとしては成功を収めたと考えている。

例年通り、活動の期間中、学生たちはインドネシア人の家庭に分かれ、ホームステイをした。今年も当初の予定通りに、１人１家庭はかなわなかったが、午前中に授業をした後の午後はすべて自由行動としたために、それぞれの家庭やコミュニティで人と人としての交流に励んでくれた。その結果、今年も帰国後、専攻に関わらず、インドネシア語を学ぶ学生がおり、その姿からは彼

／彼女らがインドネシアで刺激を受けて、そのつながりを大切にしようとしている心を感じとることができる。今年は、言葉も通じない外国人を受け入れるニアスの人びとの懐の深さに感謝し、ささやかながら最後の日曜日に昼食会を催した。

ニアス島での活動を終え、メダン市最後での活動は北スマトラ大学日本語・日本文学学科での交流であった。この交流に関してはスタッフの一部から「日本の学生には何の利益もないのでは」と指摘を受けてきたが、そうは思わない。北スマトラ大学で日本語を学ぶ学生は 200 人程度、いつ訪ねても、こちらが疲れるほどに日本語での質問攻めにあう。聞くと、彼 / 彼女たちが日本人に出会って話す機会はごく限られている。私たちが外国語を学ぶとネイティブと話してみたいように、日本語を学ぶインドネシア人も日本語ネイティブと話す機会を探していたり、日本の若者の生活に多大な関心をもったりしている。一方、日本の学生がインドネシアでできることは限られているが、少なくとも日本語を話すことができる。子ども相手に活動するだけでなく、大学生同士の交流も大切にしたいと思い、北スマトラ大学の学生たちと交流を続けることにした。北スマトラ大学に派遣されている日本語教師の飯尾先生と学科のアリ先生と打ち合わせた結果、こちらは日本の学生の生活を紹介し、あちらはいろいろなゲームを用意して披露してくれることになった。残念ながら、双方の出し物が続き、非常に時間がかかったために、学生たちは疲れきってしまった。しかし、インドネシア最後の思い出として、北スマトラ大学の学生たちの案内で学生たちは小グループに分かれ、メダンの街へ散策に出かけた。当初は予定通りに学生たちをホテルに送り戻してくれるかどうか不安であったが、北スマトラ大学の学生たちは携帯電話で常に連絡を取り合い、いろいろなところへ連れていってくれたようで、学生たちもよい交流ができたと喜んでいた。

こうして 12 日間にわたる活動を終了し、8 月 7 日の朝、全員、無事に関西国際空港へ帰国した。

新しい試み

今年のプロジェクトでは２つの新しいことを試みた。１つは「日本インドネシア友好年事業」へ参加したことである。これは１月の出張時に、これまでの本学のプロジェクト活動を評価していただけたのか、在メダン日本国総領事館の方々に勧めていただいたことを契機にした。今年は日本とインドネシアの間に外交関係が開設されて 50 周年目にあたるという節目の年であり、政府は「日本インドネシア友好年」と称し、両国国民の交流と世代を超えた相互理解を拡大し、深化させることを目標に、幅広い分野での交流を展開していた。その１つとして本プロジェクトは応募し、採択されたのである。それを記念して、学生たちが友好年のロゴを入れたカンバッチを製作し、活動中も身につけたり、お世話になった方々にプレゼントしたりした。また、今年の活動のために作成したドッジボール教則本と音楽教則本にもロゴを入れた（61 頁参照）。

もう１つは北スマトラ大学日本語・日本文学学科で学ぶインドネシア人学生を活動の通訳として雇用したことである。これは例年の活動において、インドネシア語の壁が厚く、なかなか子どもたちや先生方と意思疎通ができなかったこと、今年はきちんとした教育を行なうことが最重要課題であるため、どうしても言葉の問題を少なくしたかったことから、山本春樹先生、北スマトラ大学の先生方と相談して決めた。北スマトラ大学の先生方はこの学生たちを選考するために、日本語のペーパー試験と面接を実施し、応募者７名の中から５名を推薦してくださった。5 名のうち、３名はヌル・アディア小学校から同行してくれ、私たちの想像以上に、通訳を超えた

活躍をしてくれた。彼 / 彼女たちのおかげで、学生たちはインドネシア語を覚えていなくてもある程度思うように指導ができ、子どもたちとの距離も縮まったのではないかと考えている。また、こちらの学生も同年代で同じように外国語を学んでいる学生たちが通訳をする姿をみて、ある意味刺激になったのではないだろうか。最後に、北スマトラ大学の学生たちにはこういう経験をしたことが就職活動の際に役にたつということで、センター長よりプロジェクトのための日本語通訳として働いたことを示す証明書を手渡した。こういう試みも 1 つの新しい形の学習支援になるのではないかと考え、今後もできれば続けていきたいものである。

帰国後の活動報告

帰国後、準備の際にお世話になった方々に、無事に活動を終えたことを報告することにした。まず訪問したのは天理小学校である。天理小学校では子どもたちと接するときにどのようなことを留意すればよいのかとか、日本でのドッジボール指導や音楽指導のあり方を学ばせていただき、指導案を組み立てる上で非常に役に立った。その成果として、どのようなことをしてきたのかについて、ぜひ報告したいと思い、全校集会の席で有志による報告会を行なった。これは想像以上によい反響を得たらしく、学内でもいろいろな人から「天理小学校でインドネシアの話をされたそうで。子どもたちがおもしろかったといっていましたよ」と声をかけていただいた。

もう 1 つは毎年多大なご支援をいただいている天理大学後援会である。例年、スタッフだけが活動報告に伺っていたので、ぜひ一度実際に活動をしてきた学生たちの声を聞いていただきたかった。その結果、諸井会長がじきじきにセンターを訪問してくださり、学生たちに自分が何を学んできたのかを直接報告させることで、ささやかな交流の場を持つことができた。このように、今後も少しずつプロジェクトで何を得られるのかを発表する機会を増やしていきたい。

今後の課題

今年度はたくさんの方々のご協力を得られた結果、学生の応募も予想以上にあり、ニアス側との交渉もうまく進み、学生たちも無事に帰国できたことから非常によいプロジェクトができたといえる。しかし、今後の課題もいくつか残っている。1 つはニアス側のニーズとこちらのやれることを照らし合わせた上で、いかに活動を持続するのかということである。つねに「国際協力とは何か」ということを考え、それが単なる交流に終わらないように試行することが必要である。そして、何よりも「国際参加プロジェクト」の企画と運営は非常に労力がかかる。今後はさらにセンターの計画に同意してくれる協力者を探し、その協力の下でより効果的な教育プログラムを展開することが求められるだろう。

最後に、第 9 回のプロジェクトを実施するにあたり、様々な方々より多大なご支援・ご協力を賜りました。ここに記して深く感謝申し上げます。

ニアス島での活動を振り返り、評価（私見）する

国際文化学部　教授　山本　春樹

過去三年間の本学のニアス島での活動は、災害被災地への復興支援活動と「国際参加プロジェクト」の活動が密接に関わる形で行なわれてきた。その歩みを振り返り、それについての私見を述べたい。もって今後の「国際参加プロジェクト」活動を考える一助になれば幸いである。

これまでの歩み

ニアス島は2004年と2005年に大津波と大地震におそわれ、壊滅的な打撃を受けた島である。長くインドネシア学科・コースを擁してきた天理大学としてこの被災地のために何かできないかというところから出発したニアス島等復興支援活動は、2006年8月のモアウォ小学校への校舎の寄贈に結実した。

この校舎の完成・引き渡し式典はニアス県知事をはじめ島の要人の方々と小学校の地域の人びとが大勢集う盛大なものとなり、本学からは副学長をはじめとする8名のスタッフと「国際参加プロジェクト」参加学生17名が参加した。これがニアス島での「国際参加プロジェクト」の第1回目となり、それは災害被災地復興支援活動と一体化したものとして行なわれたのであるが、このプロジェクトにおいて学生が果たした役割は、直接的な支援活動ではなく、ホームステイの日々を通してニアスの人たちとの信頼と友情の絆を築いたところにあった。

この絆を引き継いで、2007年のニアス島で2回目のプロジェクトでは学生が直接的に被災地への支援活動を行なうことになった。防災教育である。地震や津波が発生した場合にどのように行動すべきかを子どもたちに教える活動である。防災教育が十分でない現地ではこのような活動は高く評価され、子どもたちにも強い印象と記憶を残し、その役割を十分に果たしたものであった。

今年の活動

しかし、被災地もやがては平穏な日常を取り戻す。ニアス島もまた災害から立ち直り、もはや災害被災地ではなくなったニアスの人たちが求めたのは、本学との間に結ばれた絆を活用して、学校教育の内容を充実させることであった。「普通の授業をしてほしい」。これが本年度のプロジェクトに向けてのモアウォ小学校側の希望であった。加えて、「単なる楽しい交歓・交流に終わらせてほしくない」という希望もあった。

教育課程の枠の中での教育活動に参画することは容易なことではない。相手のカリキュラムとの整合性を取ることが必要であるし、教える側（すなわちプロジェクト参加学生）の教授能力も必要だし、何よりも相手の言葉でのコミュニケーション力が不可欠である。そこで本年度、小学校側の要望にこたえるために採用した方法は、体育と音楽という分野を選ぶことであった。

体育教育も音楽教育もニアス島では（インドネシア全般ではない）まだ十分にカリキュラム化されていないため、先方のカリキュラムとの整合性に配慮することなく本プロジェクトが自由に

参画する余地が大きい。本学学生の教授能力にも問題がない（ただしこれは今回、インドネシアではまだ知られていない種目であるドッジボールを選択したからであり、これがサッカーやバスケットボールといった彼地でもポピュラーな種目だと話は別である。これらを教えるためにはその種目を専門にする学生の参加が必要である）。言葉の壁もこの分野だと他の教育分野に比べて低いであろう。これがこの分野を選択した理由であった。本年度のプロジェクト実施責任者の倉光先生が行なったこの選択は適切であったと考える。

活動の評価

次に、こうして実施した本年度の活動をどのように評価するかについて私の私見を述べたい。今回の活動において到達目標は次のように設定されていた。①子どもたちがドッジボールをできるようになり、その楽しさを味わい、かつ、ルールを守る態度を身につける。②小学校の先生がこの指導と審判役をできるようになる。③子どもたちが先生の伴奏にあわせて合唱する楽しさを味わう。④先生がピアニカを演奏できるようになる。⑤この教育活動をモアウォ小学校をはじめとしてニアスに定着させる。⑥参加学生が国際的な場で「他者への貢献」の達成感を味わう。

では、これらの目標は達成されただろうか。

①については予想以上に達成したといってよいであろう。はじめは何のゲームをしているのか分からないような混乱状態だったが、最終日の成果発表会では見事にゲームになっていたし、子どもたちは大喜び、かつきちんとルールを守ることもかなり身に付いていた。③も、最初は戸惑っていた子どもたちも最後はみな元気に歌うことができたことからみて、十分に達成できたといってよいだろう。②と④は甘い評価で達成度50％といったところであろうか。しかしこの数字は当初に想定していた以上のものであったことを強調しておきたい。⑤については今後どうなるかを見守るしかないが、ドッジボールとピアニカの教則本をそれぞれインドネシア語で編纂し、多部数を小学校やニアス県教育局に残してきたことで、その種は播いたといってよいだろう。⑥については参加学生の声を詳しく聞く必要があるが、個別に耳にするかぎりでは十分達成できたといえそうである。なお、学生に味わってもらいたいことは「他者への貢献」の達成感だけではなく、異文化の他者との交流・交歓の喜びの体験もあるのだが、これは村の家庭にホームステイしその家族や近隣の人たちとの友情を結ぶことで十分達成されたと考える。取り立てて親善のためのプログラムを準備する必要はない。これは、「単なる交歓・交流に終わらせてほしくない」という先方の要望にも合致したものである。

これらのプロジェクトのいわば公式な到達目標に加えて、私は個人的に次のことを目標にしていた。①モアウォ小学校の先生方の生徒指導への熱意と仕事上の規律を高めることに貢献することと、②保護者が子どもの教育により高い熱意をもつようになることに貢献することである。①は公式目標の②と③に重なる。従って達成度は50％であった。今後持続的に貢献を図る余地がここにある。②のためには教員と保護者を対象に教育懇談会を開き、日本社会の発展に教育が果たしてきた役割についての講演を行なった。これで、2006年の活動の際にすでにモアウォ小学校のPTA会長

から要請されていながらまだ果たせていなかった宿題を終えることができた。いうまでもなくその成果はすぐにあらわれるものではない。

今後の活動に向けて

「国際参加プロジェクト」は必ずしも災害被災地への直接的な支援活動として行なわれる必要はない。過去のインドでの活動は災害被災地への支援活動であったが、中国とフィリピンでの活動はそうではなかったようである。ニアス島での活動は、初年度は被災地への直接的支援活動を中心にし、2年目は被災地支援の性格を残しつつ、そこから離れた教育活動の性格も併せ持ったものであった。3年目の本年度は被災地支援から離れた教育活動に集中した。

この方向転換は適切なものであると私は考えている。直接的な被災地支援は、本学が行なった校舎の寄贈がそうであったように物的支援の形をとることが多く、パソコンを寄贈してほしいといった形での物的支援への要請はその後もモアウォ小学校側から常に出されているのであるが、それに応える態勢が大学にはない。一度これに応えると次々と際限なく要請が出てくる懸念もある。したがって、ハード面での支援活動は校舎寄贈をもって終わりにし、ソフト面での、つまり教育活動という面での協力に切り替えるという本年度の方針は、もし今後もニアス島での活動を継続するならば、維持されるのが良いと考える。

いま「教育活動という面での協力」といい、「支援」ではなく「協力」いう言葉を使った。支援というとどうしても先進の豊かなところから後進の貧しいところに向かっての行為というニュアンスが払拭できない。したがってその対象地域はいわゆる途上国に絞られる。しかし、「協力」ならばその限定から自由になる。日本の、あるいは天理大学の独自性を発揮したものを相手に提供するだけで「協力」は成立し、したがって、いわゆる先進国相手にも行ない得るものである。これならば、国際文化学部がカバーする国と地域の全域で「国際参加プロジェクト」を遂行する可能性が開かれるであろう。

最後に、今後の参考のために2つの点を付言しておきたい。

一つ目は言葉の壁についてである。日本語が通用しない地でのプロジェクト遂行にはつねに言葉の壁が立ちはだかる。英語が通じる地だけを探すのも芸のないことであろう。さりとてその地の言葉ができるスタッフがつねに参加同行できるとは限らない。この壁を克服する試みとして本年度の活動がとった手段は有効なものであると思われる。日本語を学ぶインドネシアの優秀な学生にアルバイトの形で協力してもらったのである。メダン市で学生を募集し、ニアスに帯同して通訳の仕事をしてもらった。これは本学の学生が現地学生と深く交流する機会を提供することにもなった。今後「国際参加プロジェクト」を他の地で展開する場合にも採用しうる手段であると思われる。

付言の二つ目は2007年の防災教育の継続についてである。この防災教育はその継続を期待する声が小学校側から出されている。したがってこれを継続することは検討に値する。継続する場合、今度は子どもたちへの教育というよりも、避難訓練の定着化を目標にして、その意義、ノウハウについて学校／教員に助言・慫慂する形をとるのが適切かと考える。

スポーツ班　ドッジボール指導の活動報告

体育学部　准教授　深見　英一郎

スポーツ指導報告

第９回「国際参加プロジェクト」は、インドネシア・ニアス島・モアウォ（Moawo) 小学校４年生（71 名)、５年生（69 名）を対象にスポーツ（ドッジボール）の指導を行なった。スポーツ班メンバーは、参加学生 18 名のうち 11 名（男子５名、女子６名)、現地ボランティア学生５名中４名の計 15 名であった。期間は、７月 30 日～８月２日（7 時半～ 11 時　80 分間×２コマ）の４日間の指導期間と、8 月４日の授業発表会をあわせて５日間であった。授業発表会では、４－５年生合同によるドッジボールトーナメント試合を行った。

事前に、７月 28 日 午前にメダンのヌル・アディア（Nur Adia）小学校３年生 48 人を対象に、室内で行なうドッジボールの練習教材（的あて）の指導をした。これは、ニアス島におけるドッジボール指導で雨が降った際の練習メニューであった。また、インドネシアの小学生が、ドッジボールで要求されるボールを投げる、捕るといった技術をどのくらいできるのか、さらにはドッジボールが現地の小学生たちに果たして受け入れられるかどうかを判断するための大事な試金石となった。幸い、ドラえもんやピカチューの絵が描かれた的を用いた的あて遊びは、ヌル・アディア小学校の子どもたちには大好評で、心から楽しんでくれて技術的な高まりも見られた。
7 月 29 日、ニアス島へ移動し、モアウォ小学校の先生方と打ち合わせを行なう。現地の先生方に、日本で作成したドッジボールの教則本をお渡しして、ドッジボールの楽しみ方やルールについて説明した。特に、モアウォ小学校 体育担当の２名の先生には、できるだけ一緒にスポーツ指導に参加していただき、ドッジボールのゲームの進め方やルールについて理解してもらい、授業発表会では試合進行係や審判をしてもらうようお願いした。4 日間の指導スケジュールは以下の通りである。

【1 日目（7/30)】自己紹介、準備体操の後、日本の学生たちによるドッジボールのデモンストレーション試合を行なった。試合をしながら、ボールの投げ方、捕り方、よけ方を説明した。その後、休憩＆準備を挿んでキャッチボールの練習、パス競争を行なった。

【2 日目（7/31)】初日の練習メニューに加えて、新たに「円形転がしドッジボール」と「円形投げ当てドッジボール」という２つのゲームを行なった。

【3 － 4 日目（8/1 － 2)】ドッジボールのゲームの進め方やルールに関してデモンストレーションしながら説明し、8m × 16m のコートを作成してゲームの練習を行なった。

【5 日目（8/4)】保護者を観客として迎えてトーナメント試合を行った。4 日間の練習により、子どもたちはドッジボールの楽しみ方を理解し技術も高まったことから、トーナメントは最高に盛り上がった。優勝したチームの子どもたちにはささやかな賞品（手作りのミサンガ）が

与えられた。

スポーツ指導の準備

スポーツ指導の準備とは、大きく分けて①スポーツ班の学生たちにドッジボールの指導法を習得してもらうこと、②指導計画の立案を含めて、ドッジボールの指導に必要な用具を準備すること、③ドッジボールの教則本を作成することの３つであった。

①について、体育学部のメインアリーナにおいて、私が用意したドッジボールに関するいくつかの練習メニューを学生たちに体験してもらった。自分たちが汗をかいて実際に体験することによって、ニアス島の小学生たちが楽しめるメニューかどうかを判断し、４日間の指導計画を作成した。指導計画が確定し、必要な用具がほぼ揃った段階で、杣之内キャンパスのＬ字グランドにドッジボールコートを作り、お互いが教師役・生徒役となって模擬授業を行なった。

②については、指導計画が確定しない段階で同時並行して準備が進められたので、なかなか話し合いもまとまらなかった。たとえば、ボールをどうするのかに関して、学生の中から「家庭で使われていないボールの寄贈を呼びかけて集めるべきだ」との意見が出された。また、コートについては「ドッジボールは授業というよりも、休み時間に楽しむ『遊び』だから、わざわざ石灰を使ってラインを引く必要はない」などの意見が出された。これらについては、今回のプロジェクトはあくまで現地の体育授業の中でドッジボールというスポーツの指導を行なうことが目的であることを理解してもらい、あらかじめ日本でドッジボール専用のボールを 10 個購入し、石灰は小麦粉（現地調達）で代用することになった。

③については、スタッフの間で教則本を作成することが決定した。しかし、現地の先生向けに作るのか、小学生向けに作るのか、議論になった。しかし、学生－スタッフ間の話し合いの中で、最終的には先生方向けの教則本を作成することで合意した。内容については、高橋ほか編（1994）『ゲームの授業．体育科教育別冊』（大修館書店）から一部引用して作成した。

スタッフの一員として学生たちとスポーツ指導の準備を進めていく中で、このプロジェクトに参加するすべての人びとが、それぞれの想い・考えを持って活動に取り組んでいることがわかった。例えば、この活動を企画・運営するスタッフは、インドネシアの復興・発展のために、どのような形で国際協力活動ができるのか、また、参加する学生たちに対して、どのように異国を体感させ理解させることができるのか、くわえてどのような国際協力活動に取り組ませるのかを思案していた。さらにこのプロジェクトを実際に遂行する学生たちは、「もっと世界を知りたい」、「国際ボランティアがしたい」、「将来的に NGO やユニセフといった国際機関で働きたい」等という、それぞれの想いをもって参加していた。

また、準備を進めていく中で、スタッフ－学生間のプロジェクトに対する考えや想いが異なることはもちろん、学生たちの間でも温度差があり、取り組み方も若干異なることが次第に分かってきた。しかしながら、それぞれの想いや取り組み方は違うけれど、共通に実現したい目標は、「インドネシア・ニアス島の復興・発展

に協力したい」という熱い想いであった。そのためには、指導内容や方法のあり方を学生たちに完全に任せてもいけないし、スタッフだけで完全に決定してもいけない。お互いが一緒に考え、話し合って、チームとしての大きな目標の達成に向けてそれぞれが努力する。今、振り返れば、このことが非常に難しい点であり、チームワークの大切さはいうまでもないが、同じチームのメンバーでありながらも「他者と自分とは違うんだ」ということを理解するまでには長い時間が必要であった。今回、この点で私はとても勉強になったし、学生たちも学んでくれたと思う。

成果と問題点

今回のスポーツ指導（ドッジボール）の成果とは、次の３点にまとめられる。

１つめは、モアウォ小学校の子どもたちが大したケガもなく、最後まで楽しくドッジボールを楽しんでもらえるように、私たちが指導することができた点である。ドッジボールに対して、男女とも大変興味を示し積極的に取り組んでくれた。特に、スカートをはいた女の子が髪をふり乱して楽しそうにドッジボールをしている姿は印象的であった。

２つめは、多少時間はかかったけれども、授業発表会として４－５年生合同によるドッジボールトーナメント試合を行なうことができた点である。校庭が狭く時間もなかったので、負けたチームに対して敗者復活戦は用意できなかったが、これに対して負けたチームの多くの子どもが「もう一度、試合やらしてくれ！」と要求してきたのである。それほど、現地の子どもたちをドッジボールに対して夢中にさせることができたと考えられる。

３つめは、現地の先生方を巻き込んでゲームの進め方やルールを理解してもらい、私たちと一緒にスポーツ指導に参加してもらえた点である。私たちは、今後、ニアス島の学校教育においてスポーツ文化を根付かせ、私たちが帰国した後でも子どもたちにドッジボールを楽しんでもらうためには、現地の先生方を巻き込んでゲームの進め方や審判の仕方を理解してもらうことが大切だと考えていた。最初、先生方は「できない」「暑い」などと言ってなかなか協力してもらえなかったが、私たちが粘り強く交渉し、子どもたちにスポーツを指導することの重要性を訴え続けたら、最後は一緒に指導に参加してくれたのである。

次に、今回のスポーツ指導の問題点とは、次の３点にまとめられる。

１つめは、指導する対象学年を４年生と５年生に限定したことである。私たちがドッジボール指導をしている間に、他の学年の子どもたちがとても興味深そうに眺めていた。おそらく、彼らもボールを使ってドッジボールを楽しみたかったと思われる。今後は、学年に分け隔てなく、参加できるようなプログラムを考える必要がある。

２つめは、ドッジボールの指導時間が長すぎた点である。今回、途中に休憩を挟んだものの、１回の授業時間が80分間と長かった。日本の小学校の授業時間が45分間であることと比べれば、それがいかに長かったかということが理解できる。しかも、気温が40℃近くまで上昇する炎天下の長時間の活動は、子どもたちだけでなく、私たちスタッフの体力も激しく消耗させ、集中力も低下させるといったように効果が少ないだけでなく、大変危険であった。やはり、１つのクラスに対する１回の指導時間を、もう少し短くするべきであった。

３つめは、今回の私たちのスポーツ指導が体育授業であることを、現地の先生方と子どもたちに繰り返し伝え、十分に認識させた上で参加してもらうべきであったという点である。例えば、授業が始まる前、ドッジボールを行なう校庭に石ころやお菓子の殻、さらには果物の皮などが

方々に散らかっていた。私たちは、見た目も良くないし安全面でも問題があると考え、率先してそれらを片付けたが、手伝おうとする先生はほとんどいなかった。これは、現地の先生方がそのような状況で子どもたちにスポーツをやらせるのは危険であるとの認識がなかったからであり、先生方から授業とは認識されてなかったからではないかと予想される。

また、最終日のトーナメント試合では、子どもたちのチーム分けに苦労し、開始時間が大幅に遅れてしまった。それは、チームの人数が均等になるように、それぞれの子どもたちの胸に数色の色テープを貼っていったのだが、一部の子どもには嫌いな色があったようで、こちらがテープを貼ろうとすると頑なに拒んだり、人数を確認して貼ったテープを勝手に剥がして捨ててしまったりしたからである。そのため、何回やっても人数が合わず、チーム分けするだけで1時間近くかかってしまった。これも、私たちのスポーツ指導が子どもたちから授業とは認識されておらず、自由であるはずのスポーツの中で多少の我慢と協調性が求められることに対して理解が及ばなかったからである。

くわえて、トーナメント試合において私たちは負けたチームの子どもたちに対して「時間の関係上、負けたチームはもう試合ができないので、勝ったチームを応援しよう！」と伝えたが、彼らの多くは勝手に家に帰ってしまった。日本の学校では、たとえ自分たちのチームが負けて悔しかったとしても、試合後はノーサイドの精神で友だちを応援したり試合進行を手伝ったりして、表彰式が終わるまで待つことも大切な学習内容となっている。このことは現地の先生方にきちんと指導してもらうべきことであった。

今後に向けて

日本のように学習指導要領にそって必ず毎週数時間、計画的にスポーツを指導したことのない教師や、指導されたことのない子どもたちに対して、わずか4日間でゲームの進め方やルールを理解させて、スポーツ指導の重要性を理解させ、スポーツのおもしろさを味わわせることは無理があった。また、授業であるならば、そこでは必ず何らかの知識や技術を習得させることが目的となるために、対象とする子どもの数も制限しなければならないし、成果も現れにくい。

もし、今後も何らかの運動・スポーツの指導を続けようとするならば、学年に関係なくすべての生徒が参加でき、また先生方や保護者たちも自由に参加できるような運動会のようなイベントを設定する方がよいのではないかと考える。あるいは、ソーラン節などの民族舞踊やダンス、さらにはマスゲームのような形のコンテストや発表会を開催するのもおもしろいのではないか。これなら、子どもたちの学年差や体力差にそれほど関係なく、高度な運動技術も必要としないであろう。いずれにしても、スポーツはオリンピックや世界大会に見られるように、民族、文化、言語、宗教などの違いや、国境、経済の格差を超えた交流を通じて、国際平和の創造に貢献できるだけでなく、生徒一人一人の健全な成長や社会性を育むなどの教育効果も期待できると考えられる。

今後も、インドネシア・ニアス島において、より良い形でのスポーツ指導による国際協力活動を継続することができれば幸いである。

天理大学「国際参加プロジェクト（インドネシア）」のプログラム化について
―防災教育と情操教育についてのアンケートおよびインタビュー調査の結果を参考に―

地域文化研究センター　准教授　澤山　利広
立教大学大学院　院生　髙藤　洋子

はじめに

本レポートは、「国際参加プロジェクト（インドネシア）」の活動内容（プログラム）に関する現地関係者などへのアンケート及びインタビューの結果を基に、今後のプログラム化を考察したものである。2007年度に行なった防災教育についてはアンケートを行ない、2008年度に行なったスポーツ、音楽教育に関してはインタビューを実施した。アンケートとインタビューの内容は、髙藤が地域文化研究センターの依頼に基づき起案し、スタッフミーティングにおいて設問項目を決定した。アンケートの集計・分析は髙藤が担当し、澤山が加筆した。紙幅の関係上、回答の具体的項目や内訳の一部を割愛した。

これまでの「国際参加プロジェクト（インドネシア）」概要

実施年度（回数）	実施年日時	スタッフ数	参加学生数	内　容
2006年度（第6回）	2006年 8月20日～31日	8名	17名	モアウォ小学校の建設、現地児童への折り紙指導、日本の小学生との絵の交換など。
2007年度（第7回）	2007年 7月21日～8月3日	5名	16名	モアウォ小学校、サエヴェ小学校の児童に対して地震・津波の起こる仕組みや避難方法を劇やクイズを通して指導し、避難訓練を実施した。
2008年度（第9回）	2008年 7月27日～8月7日	7名	18名	スポーツ（ドッジボール）指導、音楽教師へのピアニカ指導および児童への歌、振り付け指導を実施し、その成果を授業発表会という形で披露した。

防災教育（2007年度実施）について

（設問1）の回答からは、半数以上が住居を失い、身内を亡くしている。トラウマ、ストレスをはじめとする心的ダメージを受けた人も半数以上に上る。このことから、物心両面に深刻な影響があったことが分かる。

（設問2）の回答からは、「大変良かった」などの好意的回答が27名、「まあまあだった」が3名、「まだ充分に理解できていない」が3名であった。災害直後からインドネシア政府アチェ・ニアス復興庁（BRR）と現地NGOの協力により、地域のハザードマップが作成され、Disaster Risk Reduction Trainingなどの住民の災害時の意識向上を目指す活動が行われた。モアウォ小学校の先生からは、「天理大学と他団体の防災教育の内容に違いがあるので混乱している」との声も聞かれた。

児童にとっては、今回が初めての防災教育であった。学校で教わった防災知識は児童が帰宅後に家族に話し、さらにコミュニティ全体に広がっていったようである。注目すべきは、タブー視

防災教育（2007年度実施）についてのアンケートの集計結果

実施日：2008年8月1日
回答者：33名（教員25名、ホームステイ先7名、その他1名）

（設問1）スマトラ沖地震津波とニアス島地震による影響をお聞かせ下さい。
回答：経済（16）（経済の停滞（4）、物価の上昇（4）、食糧の不足（3）、市場の崩壊（1）、職業を失った（1）、生活費の不足（1）、貧困に陥った（1）、地方への復興支援不足（1））
交通（2）（道路が寸断された（1）、信号機の崩壊（1））
教育（11）（教育の停滞（5）、テントでの勉強を余儀なくされた（2）、たくさんの教材が流され、無くなった（1）、金銭的理由で学校へ行けなくなった（2）、孤児となった（1））
不動産（30）（住居の倒壊（17）、学校の倒壊（8）、公舎の倒壊（1）、会社の倒壊（1）、上記以外の建物（3））
物的損害（15）
健康面（22）（家族、住居を失ったことによる心理的ダメージ（8）、トラウマ（6）、ストレス（4）、病気がちになった（2）、恐怖感や心配（2））
死者・行方不明者（17）
その他（離島者の増加、植物が育たなくなった）

（設問2）天理大学によって実践された防災教育についてのご意見をお聞かせ下さい。
・大変良かった（20）よく理解できた（4）まあまあだった（3）大変効果があった（2）嬉しく思った（1）
→理由：災害の時に自分の身を守る術を知ることができた（12）、災害発生時の心の準備ができるようになった（4）、天理大学の皆さんが自分たちの立場に立って物事を考えてくれた（4）、他
・まだ充分に理解できていない（3）
→理由：継続頻繁に行なうことを望む（2）、言葉の問題があった（2）

（設問3）防災教育は今後も実施して欲しいとお考えですか。必要な場合、留意点等を教え下さい。
・大変重要（5）、必要（23）
→留意点等：継続的実施（7）コミュニティの参加（4）、子どもたちを引きつける工夫（3）、他
・不必要（5）
→理由：今回で十分に理解できた（5）

（その他）天理大学に対する感想・要望
感想：・防災教育は大きな好影響があったが、もっと簡潔にわかりやすく伝えてほしかった
・教室の寄贈が有難かった
・子どもたちのトラウマがなくなった
・子どもたちは災害を乗り越え、強くなった
要望：・天理大学による教育を質量ともに増やしてほしい（モアウォ小学校の生徒数増につながる）
・文具を寄付してほしい
・さらにレベルの高い教育・授業を実施してほしい
・時間厳守等のルールを教えてほしい
・料理、裁縫、手工芸などの専門的な教育をしてほしい
・約束したことを実行してほしい

されていた災害の話題が、防災教育をきっかけに皆で話ができるようになったという点である。

（設問 3）では、防災教育を継続的に実施する必要があるかどうかを聞いた。「大変重要（5）」「必要（23）」が 84.8％を占めている。それらの回答の中には継続性に加え、コミュニティやインドネシア全体への活動の波及を期待するというものもあった。言葉だけではなく、音楽、メディア、教材、ポスターなどの活用が効果的であることが示唆された。

スポーツ、音楽教育（2008 年度実施）について

スポーツ、音楽共に良かった点としては、「楽しかった」という答えがトップであった。

スポーツを通じて、スポーツマンシップ、ルールの遵守、協調性、創造性の涵養などの教育的効果についても寄与することができたと考えることができる。

音楽については、ピアニカを用いた授業が好評であり、特にチームごとの発表を通じて、互いに学び合えたことがあげられる。

ホストファミリーに振舞う日本食の準備をしている様子

モアウォ小学校の先生たち

スポーツ、音楽指導（2008年度実施）に関してのインタビュー集計結果

実施日：2008年8月4日　　回答者：10名（モアウォ小学校教員5名、北スマトラ大学生5名）

1．スポーツの授業について

1）良かった点：

楽しかった（5）、スポーツマンシップを養うことができた（2）、初めてドッジボールを知ることができた（大変ユニークなスポーツだった）（2）、スポーツを通してルールを守ることの勉強ができた（3）、スポーツの勉強は成長過程にある児童にとって効果的だった（1）、ドッジボールを通じて創造力および運動能力を高めることができた（3）、皆で協力してひとつの競技を進めて行くことを学んだ（2）

2）改善してほしい点：

限られた学年だけでなく、全学年に行なってほしい（1）、より高度なスポーツを教えてほしい（3）、ニアス島でポピュラーなスポーツを教えてほしい（1）、日本独自のスポーツを教えてほしい（1）、もっと国際的なスポーツ（バレーボール、サッカー、バドミントン等）を教えてほしい（1）、ドッジボールをモアウォ小学校だけでなく、インドネシアの他の小学校にも広めるとよい（1）

3）ドッジボールは小学校の通常授業に取り入れることはできそうですか：できる（9）、難しい（1）

4）これからも天理大学の学生にスポーツの授業を続けてほしいですか：続けてほしい（10）

2．音楽の授業について

1）良かった点：

楽しかった（2）、創造力が豊かになる（1）、ピアニカを初めて知ることができた（1）、実際に演奏することができるようになった（1）、歌もピアニカの伴奏があったからより良かった・遊びながら学ぶことができた（1）、チームごとの発表は互いに学びあうことができた（1）

2）改善してほしい点：

全学年に行なってほしい（1）、ピアニカだけでなくギター、バイオリンなど多種類の楽器で合奏したい（1）、ピアニカのような小さな楽器ではなく、コミュニティで使える大きなキーボードでの授業を行なってほしい（1）

3）ピアニカは小学校の通常授業に取り入れることができそうですか：取り入れることができる（10）

4）これからも、天理大学の学生にピアニカを用いた音楽の授業を続けてほしいですか:続けてほしい（10）

3．スポーツ・音楽以外に、天理大学生にモアウォ小学校でしてほしい教育活動はありますか。

・スポーツ、音楽と共に防災教育も続けてほしい
・天理大学生と児童といっしょになって遠足に行きたい（生きた文化の勉強をしたい）
・児童をもっと集中させるような手段を考えてほしい（音楽の授業の合間にキャンディー、スナック菓子等を配布、スポーツの合間に水を配布）
・大会開催の際には賞品を出す（文具など、直接児童の手にわたるもの）　・体育の授業は午前10時までに（涼しいうちに）行なう　・一時間半の授業は長すぎる　・コンピュータの寄贈、使い方の指導
・英語、算数、理科の授業を日本で使っている教材を用いて行なってほしい
・チームワークを育てる授業を行なってほしい
・衛生面の指導を行なってほしい
・教育支援以外にもモアウォ小学校内のトイレ、いす、机のメンテナンスを行なってほしい

今後のプログラム化について

アンケートおよびインタビューの集計結果からは、防災教育とスポーツ・音楽指導は、共に所期の目的を達しているとみなすことができる。3年以上にわたるニアスの人々との交流を通じて、信頼関係が培われ、協働体制も整ってきたことが実感できる。モアウォ小学校の教員、父兄、地域住民のみならず、北スマトラ大学の学生からは「今後も活動を続けてほしい」、「さらに規模を拡大し協働したい」という声を聞くことができた。活動や交流、協働の過程を通じて、互いに学びあい、我々の活動が微力ながら地域の発展に貢献していることを確認することができた。また、アンケート、インタビュー自体が信頼関係を築く一助であり、新たなニーズや可能性を発見することができた。

本レポートが、天理大学の参加者と現地の方々の双方がさらに充実した活動を展開できるヒントになれば幸いです。

通訳として働いてくれた北スマトラ大学の学生たち

北スマトラ大学の学生の感想

実施日：2008年8月4日　　回答者：5名

・ニアスと日本の人びとのことをより良く知ることができた
・忘れることのできない思い出ができた　　・貴重な体験をし、たくさんのことを学んだ
・たくさんの日本文化を勉強することができた　　・天理大学学生が大変親切に接してくれた
・今後とも、天理大学と北スマトラ大学の交流をずっと続けてほしい
・インドネシアへの教育面での支援を今後も続けてほしい
・残念だったのは天理大学学生がホームステイをし、自分たちはホテル泊だったので、交流の時間が足りなかった

2008年　ニアス・健康管理面から

天理高校第二部介護福祉科　看護師　椋野　和子

第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」の参加は学生 18 名、スタッフ７名、現地スタッフ１名、通訳としてスマトラ大学学生さん５名の 31 名で現地運転手さんの心強い協力もあり、たくさんの人の協力で成り立っているプロジェクトであったと振り返ることができます。

今回はメンバー、スタッフの健康管理が主要な任務で、音楽指導の一員としても活動に参加しました。インドネシアは初めて訪れる国で、事前に知らされる情報では興味と不安が入り混じっていましたが、打ち出された計画に精一杯努力することが務めであると思いました。「例年、体調不良者が出て・・・」という話を耳にして、今年こそは身上者がゼロであって欲しいと願い、心してかからねばという緊張感をもって臨みました。

「国際参加プロジェクト」は、建学の精神「他者への献身」に基づいて活動します。現地での活動はもちろんですが、事前研修はプロジェクト成功には欠かせない重要な要素を持っています。時間のない中、都合をつけて集まり、準備段階で行き詰まったとき、基本方針に従うことの大切さを学びましたし、自分と違う相手の意見を聴き、反対意見を考慮して決定できる力、協力関係を作る力を習得していくことの学びの場でもありました。

事前研修のときから学生さんとのコミュニケーションを図り、出発までの２ヶ月は、ともに活動しながら全体の様子を見渡し、プロジェクトへの思いの共有を図り、ほぼ毎日のように集まりました。出発前には一人ひとりの健康チェックと準備状況の把握をし、メンバーが一つになれるようにと願いました。

これまで「国際参加プロジェクト」に２度参加させていただいて感じることは、プロジェクトへの参加は、次なるステップへつながっています。参加した学生の中には帰国後、留学を希望したり、海外布教に歩を進めたり、更に上を目指して勉学するなど多くの学生が活躍しています。今回もそのようであることを願っています。

出発前に実施した個人面談による健康チェックは、コミュニケーション手段として大いに役立ちました。健康状態に全く問題ない学生もいますが、何らかの不安を抱えている学生が多いことも特徴的でした。生活の不安は傾聴により問題の共有にとどめ、健康状態チェックと同時に事前の心境を聞けたことにより、抱えている不安に気づき対処できる心づもりができました。

事前活動の時間を共有することにより学生との距離を縮めることができ、昼休みの共同作業は遅々として進みませんでしたが作業に劣らず意義深いものでした。

現地で主として考えられる疾病は、主に消化器系疾患と熱中症、なれない環境でのストレスによる疲労、疲れからくる風邪症状、現地活動中の外傷などですが、特に事前の個人の健康管理と熱中症に対する理解がそれらの発生頻度に大きく影

響すると考え、理解を深めるために行った事前説明は個人の熱中症に対する意識を高め、体調不良者を少なくしたことに繋がったのではないでしょうか。

このように、実際の体調不良は午前中の暑い中での活動の疲れと緊張によるものが殆どで、半日の安静休養で回復し翌日の活動を休むことはありませんでした。

海外研修等の団体行動には救急薬を用意することが多いのですが、持参薬は各自で用意することにし、抗生物質、整腸剤、風邪薬、下痢止めなどは各自が病院受診して処方を依頼し購入しました。

熱中症資料配布と説明は熱中症についての理解を深める直前指導でした。アクア(飲料水)は各自が常時持ち歩くこと、塩飴とポカリは各自用意することを勧め、水分、塩分補給の大切さを説きました。熱中症発生時は救急体制をとる必要があります。最近新築された病院は数分で到着できる位置にあり救急搬送時は即対応してくれますし、薬局で輸液の種類を確認し、救急蘇生も可能ということで安全の確認をしました。緊急時の病院への搬送体制は現地運転手さんが常時待機くださり即対応可能でした。夜間、学生の急病時、緊急事態発生時の連絡方法はホストファミリーへ書類でお願いしました。

事前研修で生活文化の違い、言語の壁、事前の見えないことへの漠然とした不安、活動実践の不安から来る精神的不安定については、共同作業に参加した折に傾聴することである程度軽減しました。活動中は完成度に対する思い入れの相違から参加者間に葛藤があり活動や生活の中の不安材料を知り解決策を探り、現地活動中も孤独感を感じさせないために頻繁に声かけをするようにしました。

現地での健康チェックは自らの活動もあったことから十分に観察できないので毎朝のミーティングで一人ひとりと会話を交わしながら健康チェックし、休憩時間には活動中の学生の表情、動きの観察を心がけました。

「国際参加プロジェクト」は「他者への献身」の実践を通して学ぶ自己実現であり、学生たちが海外に目を向けるきっかけとなり、その後に歩む指標ともなっています。
これまで「国際参加プロジェクト」に参加した学生たちは、事後に感動を持って体験を語り、与えられることのほうが多かったと振り返ります。今回も学生の中には「終了間際に自らのプライドの高さに気づき、おだやかな気持ちになれた」、「人生観が変わった」と表現しています。何がそうさせたのか、本人たちにしか分かりませんが、一人ひとりがそれぞれに価値ある体験をしたと思っています。

スタッフとして同行し、この活動がスムーズに運ぶようにと事前から参加者一人ひとりと向き合い、健康状態の把握をし、活動への協力と見守りをし、無事帰国できたことはこの上もない喜びです。

学生から

これから始まる

の報告

Terima kasih

～活動報告～

1．事前研修

第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」の現地活動へ向けての事前研修は2008年４月30日より７月23日の結団式まで行なわれました。

■事前研修スケジュール■

４月30日（水）	**＊オリエンテーション** センター長挨拶 プロジェクト概要説明 スタッフ紹介 参加者自己紹介 事務手続き説明
５月７日　（水）	健康管理についての講習
５月10日（土）	**＊土曜日研修１** 記録の打ち合わせ 北スマトラ大学での交流について インドネシアの概説 指導準備
５月14日（水）	指導準備
５月17日（土）	**＊土曜日研修２** 伝え方講座 国際スポーツ教育について （青年海外協力隊募集説明会）
５月21日（水）	指導準備
５月28日（水）	指導準備
６月７日　（土）	**＊土曜日研修３** インドネシア語講座 指導準備
６月11日～ 水曜以外にも	各自に指導準備
７月23日（水）	**＊結団式** 神殿参拝 最終打ち合わせ

事前研修では、スポーツ班と音楽班に分かれ、ニアス島でのドッジボール指導と音楽指導のための準備を実施しました。

＜スポーツ班の準備＞

最初の活動は、実際に自分たちが教えるドッジボールを実践してみることでした。ボールの捕り方や、投げ方、逃げ方のような初歩的なことから、ゲームまで行ないました。深見先生ともこの時初めて交流を持ちましたが、体育の先生だけあって、ゲームでは手加減なしの真剣勝負をしてくれたので、初めはぎこちなかったメンバーの間にも笑顔がこぼれるようになりました。

次に、実際の授業準備の作業を始めました。その際、椋野先生からの「分担して作業を行なった方がはかどるし、一人一人に役目があった方がよいのではないか」という提案を受けて、４つの班に分かれました。１つ目は、ドッジボールのルールをまとめた教則本を作るシナリオ班。２つ目は、ニアス島の最終日の成果発表会において行なう試合の形式を決めたり、成績がよかったチームにプレゼントする物を準備したりするトーナメント班。３つ目は、メダンのヌル・アディア小学校で行なう授業内容と雨天時の練習内容を雨天班。４つ目はグランドや得点板を考える道具班（その後、この班は各班にヘルプとして入りましたが）。メンバーのほとんどがドッジボールを指導するのが初めての経験だったので、何からどのように始めたらいいのかわからないで戸惑っていた人もいました。なかなか思うように活動は進まず、時間だけが過ぎて行きました。

７月に入ったすぐの全体での話し合いの結果、スポーツ班は今までの雰囲気とは違いメンバーが皆積極的に動くようになりました。そしてさらに最初に分けた３つの班とは別に、ニアス島で行なう５日間の担当を分けました。それぞれのチームを２人から３人に分け、自分た

白線の引き方を思案する様子

デモンストレーションをして授業をイメージ

歌詞を書いて、指導の準備

ちが行なう日のシナリオを考えてきて、実際に先生や音楽班の人たちにデモンストレーションを見てもらい、自分たちでは気づかないところなどを指摘してもらいました。それを踏まえて、改善し、練習を繰り返しました。テスト期間で忙しい中も時間を見つけて集まり練習した甲斐があり、ようやく授業らしい形となりました。

約３ヶ月の事前研修で１番大事だと感じたことは、初めて椋野さんに会った時に言われた「ほうれんそう」（報告・連絡・相談）でした。それぞれが、バラバラに活動しているからといって、今、他の人たちがどんなことをしているかわからないでは、活動は成功しないということでした。実際、雨天時班とのコミュニケーションが全く取れていなくて、ギリギリまで自分たちが何をどのようにすればいいのかわからないという事態が起こりました。この時、「ほうれんそう」は大事だということを再認識させられました。

なんとか雨天時班の準備も間に合い、あとは後悔なく自分たちがやってきたことを上手く相手に伝えることができるかという緊張と早く自分たちが考えたことを実践してみたいという気持ちを抱きながら、インドネシアへ出発となりました。（北村報告）

＜音楽班の準備＞

今回、第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」はインドネシアの小さな島であるニアス島のモアウォ小学校でスポーツ指導及び音楽指導が主な目的で行なわれる。私たち音楽指導班はそのために３ヶ月間という短い期間に次のような活動準備を行なった。

音楽班は７名、スポーツ班よりメンバーが少なかった。まずはプロジェクトメンバー全員で顔合わせをし、自己紹介をした。個性の強い子が多いような予感もし、プロジェクトに対する考え方も一人一人違った。ただ、この場に集まった人たちの志すものは一緒であった。それは「他者への献身」である。それぞれがお互いを知り合えるように、各自プロフィールをまとめた本がつくられ、少しずつ、メンバーについて知ることができたと思う。

音楽班の活動はスポーツ班の活動とは異なり、とくに指導してくれる教員がいなかった。その代わり、天理小学校の合唱クラブと小学１年生の授業を見学させていただいた。合唱クラブは尾上先生の指導の下、夏の合唱コンクールを目指して、児童たちが練習に励んでいた。その練習メニューに参加させていただき、一緒に歌を歌ってみた。正直、小学生の歌唱力の高さに驚愕したが、イ

土曜日研修には椋野先生と髙藤さんも参加してくださいました

天理小学校の合唱クラブでいろいろ学びました

ンドネシアで子どもたちに合唱を教えるときの指導に役立つヒントをたくさんいただいた。

また、天理小学校の１年生の音楽の授業も見学させていただいた。今回のプロジェクトは情操教育がテーマであり、私たちがインドネシアの子どもたちの先生にならなければならない。そのために、同じように日本の小学校の１年生の児童がどんなものなのか、授業の進め方はどのようにすれば良いのか、試行錯誤しなければいけなかった。

その後の事前研修では、インドネシアで授業をするにあたって必要となるであろう教材を手分けして作成した。モアウォ小学校の児童に『大きな栗の木の下で』と『幸せなら手をたたこう』を教えるために、大きな模造紙に２枚ずつ、日本語の歌詞を書いた。とくに『幸せなら手をたたこう』はインドネシア語でも歌われているというので、インドネシアからの留学生に歌詞を教えてもらい、インドネシア語ヴァージョンも用意した。また、歌詞の一部をすぐに変えられるように小細工も施した。

モアウォ小学校では、子どもたちだけではなく、先生方にピアニカの弾き方を教えることになっていた。初めての楽器であるピアニカを私たちがいなくても手入れし、使い続けることができるように、先生方と写真を多用した教則本を作成した。

現地での活動が近づいてきたとき、音楽班は合宿も行なった。現地では通訳をして下さる人はいるが、授業をする前にやはりインドネシア語を覚えなくてはならない。そして、プロジェクトのメンバー間の距離を縮めるためコミュニケーションも兼ねていた。現地では合宿で習得したインドネシア語を使用することが多々あった。

このように、事前準備では、いろいろなことを考えたり、いろいろなものを作成しなければならなかったので、とても大変であった。しかし、私たちはすべての活動準備において、相手の立場になって指導ができるように考え、準備するように心がけた。

（笠木報告）

2．結団式

事前研修の締めくくりとして、学長先生のご臨席の下、結団式を執り行ないました。

７月23日午後６時より、インドネシアの出発を前にして、地域文化研究センターにおいて、結団式が行なわれました。

私たちのリーダーである笠木君が抱負を述べ、学長先生と住原地域文化研究センター長から激励の言葉を頂きました。そして、インドネシアの出発に向けて、学生一人一人はこれまでの活動を振り返り、出発への意気込みを話しました。

その後、全員で本部神殿に向かい、全員が無事にインドネシアで活動し帰って来られるよう、４回生近藤さんの手に合わせて、おつとめをさせていただきました。

（岡本美報告）

結団式と神殿参拝の後は、センターで最後の打ち合わせをしました。いよいよ、インドネシアへ出発です。

事前研修ではいろいろなことがありましたが、１つのチームになれました

3．現地での活動

■現地活動スケジュール■

7月27日（日）	**関西空港集合** 関空発→シンガポール経由→ メダンへ　到着後はホテルへ ＜ホテル泊＞
7月28日（月）	ヌル・アディア小学校訪問 在メダン日本国総領事館 公邸表敬訪問 ホテルで活動打ち合わせ ＜ホテル泊＞
7月29日（火）	メダン発→ニアス島へ ホテルオトモシで昼食 モアウォ小学校到着 ホームステイ先との顔合わせ ＜ホームステイ＞
7月30日（木） ～ 8月2日（土）	・午前 モアウォ小学校で授業 ・午後 ホームステイ先で交流 ＜ホームステイ＞
8月3日（日）	キリスト教礼拝経験 ホームステイ先とのお食事会 ＜ホームステイ＞
8月4日（月）	モアウォ小学校での成果発表会 ＜ホームステイ＞
8月5日（火）	ニアス島→メダンへ ホテルで昼食・休憩 メダン市内見学（希望者のみ） 天理大学関係者との夕食会 ＜ホテル泊＞
8月6日（水）	北スマトラ大学訪問・交流 メダン発→シンガポールへ
8月7日（木）	シンガポール→関空着 関西空港で解散

■ヌル・アディア小学校

インドネシア到着後、最初に訪れたのが、日本のODAによって建てられた、メダン市郊外にあるヌル・アディア（Nur Adia）小学校でした。

小学校に着くと、大勢の子どもたちが道路から学校の入り口までの小道に日本とインドネシアの国旗を持って並び、私たちを歓迎してくれました。着くと同時に高学年の子たちが演奏する鼓笛もにぎやかに聞こえてきました。教室の外も中も子どもたちでいっぱいでした。演奏が終わると、校長先生が歓迎の挨拶をしてくださり、子どもたちが栽培したランブータンやマンゴスチン、ココナツなどを振舞ってくれました。

日本とインドネシアの国旗を持つかわいい児童たち

＜スポーツ班の活動＞

授業ではニアス島で雨天の場合に行なう予定の室内での練習を行なった。授業ではまず男の子と女の子を一緒にして4つのグループに色分けした。言葉も通じなければ、私たちも初めての授業だったし、まだ通訳をしてくれた北スマトラ大学の学生とも連携がうまく取れず、子どもたちも元気いっぱいで、大人しく並ばせるのはすごく大変だった。最初にしたのは、チーム対抗のストラックアウトである。これは、ピカチュウやドラえもんなどの絵を描いた模造紙に穴を一つ開けておいて、どのチームが全員その穴に新聞紙で作ったボールを一番早く入れ終えることができるのかを競うものである。キャラクターの絵は子どもたちの心を掴むことができた。しかしボールを渡すと合図を待てずに投げ出す子や、投げる順番を守れずに横入りをする子、入れ終わっても何度も入れる子もいた。また、興奮する男の子を横目に、女の子の中には投げるのをやめてしまって、後ろで座って見ているだけの子もいた。

そんな中、なんとか一番のチームを決めて、次のペットボトル倒しリレーに移った。これは先程の応用で、前に並べてあるペットボトルを倒していくものである。これもストラックアウトと同様で、通訳の学生さんが一生懸命に注意をしてくれているのにもかかわらず、教室の中はごちゃごちゃだった。気がついたら、よそのクラスの子どもも教室の中に入って、ああだ、こうだと、チー

ムを応援していた。もはやどのチームが一番なのか、いや、全員終わったのかすら、よくわからないまま指導は終了した。

うまい具合に授業は進まなかったけれど、ニアス島に行く前に授業ができて、子どもの様子も分かって、結果的にはとても勉強になった。（児玉報告）

＜音楽班の活動＞

私が所属する音楽班のＢ班では、まず北スマトラ大学からきた通訳の学生であるりんごちゃんの先導の下、各々の自己紹介から始めた。それから、良い声を出すための柔軟体操、発生練習を行ない、今回教える課題曲『大きな栗の木の下で』の説明、実際に目標である日本語で歌ってみるという流れで授業が進められた。

教室にいる子どもの数は全員で20人ほどだったので、事前研修から予定していた子どもに伝わりやすいように、少人数でミニクラスを作り綿密に教えるという形式をとった。私たちは４つのミニクラスに分かれ、授業を始めた。やはり十人十色というだけあって、様々な個性の子どもたちがおり、熱心に話を聞いて授業に取り組んでくれる子もいれば、全く話を聞かずボーっとしていたり、友達とふざけあっている子もいた。あらかじめ用意したインドネシア語の指導用語もあったが、子どもたちはほとんど耳を傾けず授業の進行が困難であった。

そもそもミニクラスでの授業形式とは、私たちがローマ字で書かれた『大きな栗の木の下で』の歌詞の紙を持ち、先に私たちが歌い、それに合わせて歌ってもらうというもので、互いにかなりの集中力が必要となってくる。したがって、当然のことだが子どものほうが先に飽きてしまったのかもしれない。こちらも初めての授業だったので授業終了後は少し疲労感を覚えた。一応工夫しては、子どもが飽きないように一人一人歌わせたり、合間に少し休憩をとったりなどしたが、思っていたほどの効果はなかったようだ。しかし、そんな中でもちゃんと歌えるようになった子もおり、無駄ではなかったと喜びを感じるときもあった。ヌル・アディア小学校での経験は確実にモアウォ小学校での音楽班の活動に繋がったし、子どもたちの笑顔に元気をもらった。（福田報告）

それぞれに授業を終え、最後には先生方も含めて、全員で記念撮影をしました。私たちが帰るときも子どもたちは列を作って、来たときと同様に笑顔で見送ってくれました。

的（ペットボトル）当ての練習をする様子

はじめに皆で一緒に歌っている様子

ストラックアウトをする様子

ミニクラスに分かれ１人１人と一緒に歌う様子

■在メダン日本国総領事公邸訪問

初日は在メダン日本国総領事公邸を表敬訪問し、私たちの活動を応援してくださっている総領事館の皆さんとお会いしました。

公邸に到着するとすぐに、青山領事と秘書のマリアティさんが少し緊張気味の私たちをにこやかに出迎えてくれました。公邸の中に入りまず目に入ったのは、日本の鎧兜でした。インドネシアにいるにもかかわらず、日本の空気を感じられたことに驚きました。広間には、私たちのために綺麗にセッティングされたテーブルが並んでいました。

私たちが席に着くと、まず城田総領事からご挨拶がありました。総領事からは「旅行ではできない経験をして、元気で帰国してください」との激励のお言葉をいただきました。総領事の挨拶の後、私たち全体を代表して住原先生が総領事館の皆様のご好意に対する感謝の言葉を述べました。そして、最後に学生代表として、岡本暁子さんが「皆で力を合わせて、プロジェクトを成功させます」との決意を述べました。

総領事公邸では、私たちのために昼食としてインドネシア料理と和食を用意してくださいました。インドネシア料理にはそれぞれに料理のネームプレートが並べられていて、とても細やかな心遣いが感じられました。インドネシア人が作ったとは思えないほど本格的な日本食に感動し、学生だけでなく、先生方も夢中になって料理をいただきました。デザートのフルーツは、やはり南国のフルーツとだけあってとても色鮮やかで甘く、美味しかったです。

昼食を美味しくいただいた後、各テーブルにて談笑を楽しみました。青山領事には、スマトラ沖大津波発生直後に行なったニアス島での緊急支援についてのお話を伺いました。また、インドネシアでの生活についてもお話くださいました。秘書のジュリンダさんからは「ＯＤＡの活動について、日本人の学生はどう思っているか」などの質問を受けました。ジュリンダさんは日本語を勉強し始めて１年半程にもかかわらず、とても日本語がお上手で驚きました。

はじめは緊張していた私たちですが、美味しい料理と総領事館の方々の手厚いおもてなしに、いつの間にかリラックスし、楽しい時間を過ごすことができました。普段では訪問することのできない総領事公邸に伺うことで改めてこの「国際参加プロジェクト」に対する責任の重さを実感しました。学生一同、次の日からのニアス島での活動に気持ちを引き締め直した１日になりました。

（新山・松村報告）

私たちを温かく迎えてくださった、総領事館の皆様方に、改めてお礼申し上げます。

日本食に感動し、たくさん取っている様子

各テーブルで談笑する様子

最後に、お世話になった皆様と集合写真

■モアウォ小学校における活動

第9回「国際参加プロジェクト」の主たる活動地であるニアス島モアウォ小学校では7月30日から8月2日の4日間にわたり、スポーツ班と音楽班に分かれて、授業を行ないました。

＜スポーツ班の活動＞

1日目、いよいよドッジボールの授業開始！初めに対象学年の4・5年生に、これから学ぶドッジボールについて知ってもらい、興味を持って取り組んでもらうために、ドッジボールをデモンストレーションをしながら説明した。子どもたちはドッジボールをすることも、見ることも初めてなので、要所要所で笛を吹き、試合を止めて、内野・外野の概念や試合開始時・終了時の礼など、ゆっくり説明した。全体説明の後、普段の試合を実践して見せた。すると、子どもたちは「やってみたい！」と興味津々。その後、基本のボールの投げ方・捕り方・よけ方もデモンストレーションを通して説明した。ここまでが予定していた初日の授業内容であったが、子どもたちが実際に試合をしてみたいというので、4・5年生、そして対象学年でない6年生も含めて、各学年1回ずつ試合をした。初めての挑戦だったので、ルールはまだ分かっていないようだったが、楽しそうに取り組んでくれた。反省点は、子どもたちの数が想像以上に多く、誰が4・5年生なのかを把握できなかったことだ。したがって、他学年の子どもが混ざっていたり、同じ授業を2回受けている子どももいた。また、子どもたちがあまりに可愛いのでつい相手をしてしまった。2日目からは、対象学年をしっかり分けること、そして一人一人が「先生」という意識を持って授業をすることを決めた。

2日目は、基本のボール操作を身につけ、ボールに慣れることを目標とした。まずはキャッチボール練習で、昨日の練習を振り返りながら、ボールの「投げ方・捕り方」を練習した。最初は学生と子どもたち、次は子どもたち同士でパスの練習をした。そして「円形転がしドッジボール」で「よける」練習を行なった。最後の「円形投げ当てドッジボール」では、基本の動作の「投げる・捕る・よける」をゲーム感覚で取り入れた。子どもたちは私たちの想像以上にボールを操作できる能力があった。しかし、投げる手と踏み込む足が同じだったり、両手でボールを投げていたりしたので、正しいフォームを身につければ、更に上達することは間違いないと思われた。したがって、フォームの徹底指導とパス練習＝ボールに触れる機会をもっと増やすことを決めた。そして、指導の狙いを伝えることも反省点になった。例えば、「「円形転がしドッジボール」はよけ方の練習です」と教えれば、子どもたちは実際のゲームを想像しながら練習できたと思われる。また、子どもたちは例えばワンバウンドのボールに当たったときにセーフになるのかどうかなど、細かいルールをまだ理解できていないようだった。それゆえ、もう一度ルールの説明をし、アウトになった子に手を挙げさせて外野に連れて行くことを徹底することにした。

3日目は、正しいフォームが身につくようにパス練習をした後、ゲーム練習でルールを実践的に身につけることにした。まずは深見先生の指示で、全員で準備体操をした。初めてみる日本の準備体操を子どもたちは見様見真似で楽しそうにやってくれた。次に、4チームに別れてパスゲームを行なった。各チームに私たちがつき、ボールの投げ方、捕り方について、一人一人に正しいフォームを指導した。その後、再度ルールの説明を行なった。まずは私たちが2チームに別れてゲームのデモンストレーションを行ない、ボールが当たるたびにゲームを止め、ワンバウンドなどの細かいルールを説明した。そして実際に子どもたちを赤・青・黄・緑の4チームに分けて、ゲームを行ない、当たったら手を上げて外に出ることを教えた。初めはみんなボールから逃げているだけだったが、だんだんとボールを積極的に捕りに行く姿が見られた。反省会では子どもたちがルールを理解し、私たちなしでもゲームができるように、なるべく手を出さずにゲームを進行しようということと、動きが激しくなるために石などに当たり、子どもたちがケガなどさせないように注意することを決めた。

最終日の4日目はゲームを中心としたルールの徹底を目標にした。まずは子どもたちに手伝ってもらいながら白線を引いた。準備体操をした後、昨日と同様のパス練習を行なった。その後、昨日まだ理解できていなかったルールをもう一度教えた。そして、トーナメント表を作り、次の日の成果発表会をイメージしたゲームの授業に入った。子どもたちはもうドッチボールに慣れ、白熱したゲームを見せてくれた。また待機している他のチームの子どもたちもゲーム中の子どもたちを一生懸命応援する姿が見られた。ボールが当たれば私たちが手を引かなくても、子どもたちが自分からコート出るようになり、きちんとルールが身についてきた。最後に、次の日の成果発表会では、限られた短い時間の中で私たち学生一人一人が周りを見てもっと積極的に動き、スムーズに進めようと、皆で意気込んだ。

最終日には、子どもたちは勝つと輝くような笑顔で喜んだり、負けるととても悔しがるようになった。そのような様子を見て、ドッジボールを教えることができて良かったと嬉しかった。　（岡本暁・岡本美報告）

スポーツ班の活動写真

最初はなかなか上手に投げられませんでした

上手に投げられない子どもたちに
優しく教えました

きれいなフォームになりました！

ボールを捕る練習とよける練習も
忘れずに行ないました

試合の前はお互いに礼をすることも教えました

勝ったチームは仲間みんなで
大喜びです！

＜音楽班の活動＞

私たちの担当する音楽指導班はＡ班とＢ班の２つに分かれて、２年生に『大きな栗の木の下で』と３年生に『幸せなら手をたたこう』を教えた。

活動初日は祝日であったため、学年等には関係なく子どもたちが教室に出入りしてしまい、授業としてはあまり良い環境ではなかった。『大きな栗の木の下で』を指導するにあたり、両班ともに栗が何であるのかという説明から始め、実際の栗を配って試食してもらった。反応は日本人と同じで、好きな子もいれば、嫌いな子もいた。この日は急遽１年生への指導も頼まれ、２年生用のプログラムである『大きな栗の木の下で』を指導しなければならなかった。３年生は『幸せなら手をたたこう』をインドネシア語ですぐに歌えたため、レクリエーションにもこの曲を使用し、インドネシア語での歌唱を徹底した。一方、Ｂ班では当初予定していたミニクラスという授業方法では生徒がまとまらなかったため、チームティーチングという授業方法で行なうことにした。準備不足のため、こちら側の話合いにより度々授業が止まってしまうなど問題も発生したが、レクリエーションでは「静かにする」という意味のうさぎのカードが大活躍した。この日は、生徒を飽きさせずに教えることが課題となった。

２日目からは２年生の指導を開始した。Ａ班ではミニクラスでの指導を試みたが、グループごとで差が生じたり、別のグループに気をとられるなどあまりよくない結果に終わった。レクリエーションも１日目と同じものを行なうがうまく進まなかった。発声練習、準備体操、歌の練習は順調に進んだが、担任の先生が教室を出るたびに教室内が騒がしくなってしまった。３年生は発声、準備体操、曲の練習ともに順調で、日本語の歌詞も難なく歌えた。『幸せなら手をたたこう』のリズムや音程が日本のものとは多少異なっていたが、インドネシア語のものを採用することにした。Ｂ班の授業では机を教室から出し、椅子を壁につけて、教室を広く使えるようにし、２年生ではピアニカで伴奏をつけ、クラスを半分に分けたり、男の子と女の子で分けたりして、５人ずつ前に出して歌わせてみた。全体として振り付けまで教えることができた。３年生はインドネシア語の歌詞は問題なく歌うことができ、日本語の歌詞も歌詞カードを見ながら歌うことができた。グループごとに歌わせた時に、歌っていない生徒に落ち着きがなかったため、歌詞カードを持たせる等の役割を与えたことでまとまりができた。

３日目、いよいよ授業もあと２日となった。Ｂ班は２年生の授業前に課題曲を流し、レクリエーションに時間をとったため、準備体操の後に休憩時間を挟んだ。その休憩時間に何人かの子は自主的に歌詞をノートに写していて、うれしかった。５人ずつ前に立たせて歌わせてみると、全体的に形になってきた。授業の最初と最後に全体で合わせてみた。３年生ではインドネシア語の歌詞を４人ずつ前に立たせて、一人一番ずつ振り付きで歌わせてみた。日本語の歌詞は２人１組で歌わせた。日本語はまだ覚えておらず、振りと歌詞も合わなかったため、授業の終わりに歌詞をノートに写してもらい、家でも練習するように指示した。Ａ班では、２年生は前日に比べれば落ち着いた雰囲気で授業をできたが、レクリエーションの際は興奮し、けがをしそうになったため、すぐに中止した。発声、準備体操は身についてきた様子で、歌や踊りも全員で行なう分には見本等がなくてもできるようになった。モアウォの先生たちのアドバイスにより、自信のある子は前に立って１人で発表させた。他の子が発表している間は静かに見学、または自分の間違えているところや他の子の間違いを指摘するなど相乗効果になったようだ。３年生のクラスでは、歌詞カードは必要なくなったが、同じ曲を繰り返しているためか、子どもたちの集中力がなくなってしまった。担任の先生が注意をしてくれたので授業としての雰囲気は何とか取り戻せた。レクリエーションは初日と同じものを『幸せなら手をたたこう』で行なった。２日目の反省を踏まえてミニクラスは行わなかったが、１番から４番までのグループをつくり順番に発表させた。また、この日から発表会でピアニカと合わせるために、ピアニカでの伴奏を取り入れての練習も開始した。

最後の授業となる４日目には、両班は２・３年生ともに発声練習、準備体操後、実際での授業成果発表会を想定して、校舎裏で練習を行なった。暑さや屋外での練習ということで集中力がとぎれそうになったが、互いの班の活動をみることでいつもより気合が入った。発表会で上手にできたら賞がもらえるという話も影響したのだろう。子どもたちの合唱は問題なかったが、歌うテンポが早いので、先生たちのピアニカ演奏がついていけず、合わせるのに苦労した。『大きな栗の木の下で』では、「あなたと私」のポーズがまだ習得しきれておらず、最終的に両クラスそれぞれに歌い、どちらがより元気に歌えるのかを競わせた。何回か先生のピアニカ演奏と合わせた後、子どもたちを教室に戻し、解散した。Ｂ班だけは１回だけ歌と振付けを合わせて教室へ戻り、２人ずつ歌わせて、歌えた子から帰宅させた。　（近藤・堀崎報告）

暑い中、スポーツ班も音楽班も試行錯誤しながら、一生懸命になって授業をしました。モアウォ小学校の先生方も最初はとまどっておられましたが、最後には参画していただけました。

音楽班の活動写真

「象さん」が出たら大きな声で歌うことにしました

いい声を出すために準備体操をしました

歌詞を見て、皆で歌の練習です

みんな、真剣に聞いています

歌詞を覚えるためにノートに書き写します

振りもつけながら、とても上手に歌えました

＜成果発表会＞

私たちがモアウォ小学校で行なったスポーツ指導と音楽指導の内容と成果を学校の先生方だけなく、PTAの皆さん、そしてニアス県教育局の方々に広く知っていただきたいと考えて、活動の最終日は授業成果発表会を開催しました。スポーツ指導はドッジボールのトーナメント試合で、音楽指導果は発表会という形で成果を披露しました。

今日は、私たちが４日間にわたって行なってきたスポーツ・音楽指導の成果を発表する日。それぞれの班は子どもたちとの最終打ち合わせと準備に追われていた。子どもたちの親も時間が経つにつれて段々と増えてきて、成果発表会が始まった。モアウォ小学校の校長先生が挨拶をし、次にニアスの教育局長が挨拶をした。そして、先にスポーツ班の発表が行なわれた。

スポーツ班は４・５年生を対象とし、10チームに分けてトーナメント戦を行なった。今までやってきた指導を基に、モアウォ小学校の先生が審判となりゲームを進めていった。多くのスポーツ班の学生はサポーターとして付いていた。私たちが日本に帰ってからでも、現地の方々だけでもできるように、モアウォ小学校の先生１人で試合を進めてほしかったが、コートの近くに近寄る観客を整列させたり、ボール拾いなどの係で私たちも手伝わざる得なくなり、結局、先生１人でという形はとれなかった。炎天下の中、試合は順調に進んでいった。１位と２位が決まり、それぞれに異なった種類の手作りのミサンガを賞品として贈呈した。

トーナメント戦をする様子

次は音楽班の発表である。音楽班は２・３年生を対象とし、それぞれの学年をＡ・Ｂの２つに分け、合計で４つのクラスに分かれて発表した。先に２年生の２クラスの発表が行われ、発表曲は『大きな栗の木の下で』である。syoの発音が上手くできていない子もいたが、皆、大きな声で歌うだけではなく、振り付けもしっかりできていた。続いての３年生の発表曲は『幸せなら手をたたこう』だ。この曲はインドネシア語で現地でも歌われている曲なので上手に歌えていた。しかし、日本の歌い方とはリズムが少し違う部分があったので、その時はインドネシアで歌われているリズムを採用した。無事に４つのクラスが発表を終え、子どもたちには４日間の授業の記念として、一人ずつに首からかけられる表彰状のようなものを渡した。

成果発表会を通じて、今回の私たちのスポーツ・音楽指導が成功だったのか失敗だったのかは正直に言って分からない。今頃、ニアスのモアウォ小学校でドッジボールが行われているのか？また、ピアニカの授業を実施しているのか？私たちがインドネシアに行く前の事前研修から目標としていた「活動の継続」が果たせたのかはまた行って確認しないと分からない…ただ、一人が少しの部分でも覚えていてくれれば、皆が集まればドッジボールの１ゲームや歌の１曲をできると思う。それを信じて、私たちのニアスでの活動に幕を閉じた。

（石田・井元報告）

『大きな栗の木の下で』を披露する様子

成果発表会が終わった後は、お別れの簡単な式典があり、記念品を贈呈しました。記念品は新品の２台のピアニカと授業で使用した10個のドッジボールです。これらは言語教育研究センターの「まなびーた」からいただいた寄付金で購入させていただきました。「まなびーた」の皆さん、本当にありがとうございました。

ボールの贈呈

<ホストファミリーとの御礼会>

モアウォ小学校の活動中、私たちはホームステイをして過ごしました。私たちを家族の一員として温かく迎えてくださった皆さんに感謝の意を示すために、日曜日はホテル・オトモシにお招きして、お食事会をしました。

日曜日の昼食にお世話になったホストファミリーを招待し、御礼会をした。はじめにホールで学生が泊まらせていただいていたホームステイ先の家族を紹介し、住原先生から家族への感謝の言葉が述べられた。続いてモアウォ小学校の校長先生からご挨拶をいただいた。最後に今回私たちの通訳を担当してくれた北スマトラ大学の学生を紹介して、屋外のテラスへ移動した。

テラスではすでにホテルと先生方が準備した料理が並べんでいた。そして、それぞれ家族と一緒にバイキング形式での昼食を楽しんだ。みんなが満足そうな顔をしたところで集合写真を撮り、盛会のうちに御礼会は終了した。 (橘・武田報告)

ホストファミリーの紹介

ホストファミリーと一緒に食事をしている様子

■北スマトラ大学での交流

インドネシアでの活動の最終日、活動中通訳をしてくれた北スマトラ大学生の母校で交流しました。

日本語を勉強しているインドネシアの学生と交流し、日本の文化を知ってもらうためと生の日本語と触れ合ってもらう機会をつくるために、６つのグループに分かれて日本や天理大学について、パワーポイントを使って発表しました。

１つ目は奈良についての紹介でした。奈良県の位置や県知事、いま話題のキャラクター「せんとくん」や奈良公園、東大寺などの観光名所を紹介しました。天理市についても天理駅や本通り、天理教などを紹介しました。２つ目は天理大学についてです。天理大学が創設されるまでの歴史や盛んなクラブ、また国宝が置いてある図書館について紹介すると、向こうの学生は驚いていました。３つ目は一人暮らしをしている日本の学生の１日を着ぐるみを着て紹介しました。４つ目は日本の食べ物についてのクイズをし、北スマトラ大学の学生にも参加してもらい盛り上がりました。５つ目は日本で流行っているギャグと関西弁講座をしました。あちらの学生にうけるギャグもありました。関西弁講座は「ありがとう」という言葉を使ってイントネーションの違いを一緒に練習しました。最後の班は、日本で流行っている音楽について発表しました。浜崎あゆみ、宇多田ヒカルなどはインドネシアでもよく知られていました。

私たちの発表の合間には、北スマトラ大学の学生がトルトルダンスというバタック人の伝統的なダンスを見せてくださり、私たちも踊りに参加しました。とてもかわいらしいダンスでした。日本舞踊も披露してくれました。私たちの発表が終わると、親睦を深めるためのゲームをしてくれました。私たちも参加して大いに盛り上がりました。今回の訪問は私たちにとっても貴重な体験となり、北スマトラ大学の学生も日本を少し知ることができた時間になったと思います。 (井上・山口報告)

4．帰国後の活動報告

インドネシアでの活動を終えて、全員無事に帰国することができました。秋学期には、私たちの活動を支援してくださった天理小学校と天理大学後援会に私たちのインドネシアでの成果を報告しに行きました。

■天理小学校での報告会

9月26日、インドネシアで行なった「国際参加プロジェクト」のことを天理小学校の全校生徒と先生方に報告するために天理小学校を訪問しました。まず、報告会が行なわれる4階の講堂に集合し、パワーポイントを使って報告するための役割などの最終打ち合わせをしました。そうしていると生徒や先生方が部屋に入って来られました。どんどんにぎやかになっていって、今から報告会が始まるんだということをすごく実感することができました。

報告会は8時15分ぐらいから始まりました。最初にインドネシアについて紹介をしました。紹介する時はパワーポイントを使って、声に出して問いかけるようにしました。「インドネシアはどこにあるのでしょうか？」、「日本にもっとも身近なインドネシア語は何でしょう？」などと聞いてみると、1年から6年の生徒のほとんどの子が「インドネシアはそこだよ」とか「わからない」など大声を出して答えてくれました。その様子がすごく活発で、とても積極的に参加してくれたので、本当に嬉しかったです。次にインドネシアの食べ物とインドネシア語を少し知ってもらいました。食べ物ではナシゴレンとピサンゴレンを紹介し、インドネシア語は「「おはよう」は「スラマッパギ」といいます。みんなも一緒に言ってみよう」と言うと、子どもたちがみんな「スラマッパギ」と元気に言ってくれました。他にも「ありがとう」や「どういたしまして」などの言葉を教えました。その途中で私たちはインドネシア語で自己紹介をしました。みんなインドネシア語にとても興味津々でした。最後に、「国際参加プロジェクト」のメインでもあったモアウォ小学校でドッジボールとピアニカや歌を教えてきたことを報告しました。まず、ドッジボールを教えたスポーツ班のことを報告し、次に音楽班の報告をしました。パワーポイントにドッジボールをしている場面やインドネシアの子どもたちに歌を教えている場面などの活動していた時の写真を映したので、とても興味深く見てくれました。

すべてが終わり、この報告会の様子を天理小学校の校長先生や教頭先生に「とてもよかった」と高く評価していただきました。報告会の全体を通して、子どもたちが真剣によく聞いてくれていたので、とてもよかったです。

（中辻報告）

インドネシアに関するクイズをしている様子

■天理大学後援会会長との面談

10月20日のお昼休みに、天理大学後援会会長の諸井さんにセンターにいらしていただき、私たちの活動報告をしました。諸井さんは私たちの報告を質問も交えながらじっくりと聞いてくださいました。そして、最後に、全員に対して、「この経験をいかし、制度にとらわれずに、心で動ける人になってください」という素敵なお言葉をかけて下さいました。

諸井後援会長に活動を報告しました

～感想文～

「サオハグル　ニアス（ありがとう　ニアス）2008」

石田　賢人
（イスパニア語　２年）

「ムライ（始め）!!」今年も個人感想文、並びに報告書作成が始まった。私は昨年に続き２回目の参加である。２回目のインドネシアで、やっぱりインドネシア（ニアスやメダン）含めインドネシア語が好きだと再確認した。というのも、昨年のプロジェクトの帰国後、少しだがインドネシア語の授業も取り、今回のインドネシアで自分の専攻の言語よりインドネシア語が更に上達してしまった。「¿Qué puedo hacer?（どうしたらよいだろうか？）」

昨年は、自分の将来の夢である国際関係の職に就くための一歩として経験を積みたくて参加したが、今年の参加動機は純粋にインドネシアにハマり、ニアスのファミリーに会いたいというものである。もう１つの大きな動機として、昨年行なったニアスでの防災教育が現在ではどのように受け継がれているのか、活動の継続の確認もしたいというのがあった。

今年の目的は情操教育である。スポーツ指導と音楽指導の２つを行なったが、私は音楽班であった。事前研修では２班とも右往左往していろいろとあったが、無事に終えることができたと思う。ただ、事前研修で準備したことが現地で役立たなかった面もあり、もっとできることがあったのではないだろうかと反省した点もあった。はたして、今年のスポーツ・音楽指導は成功したのだろうか？メンバー内では、感想文を読んでもらったら分かるように賛否両論である。私も今回の活動についてはどっちつかずである。すぐに伝わらない、伝わったのかが分からないのが情操教育であるとも思う。ただ、音楽指導に関していうと、１つは、３日目の音楽指導の時に私たちが何も言ってないのに子どもたちが歌詞を自分のノートに写し始めたこと。もう１つは、成果発表会の日の朝に、スポーツ班の発表を見ようと天大の生徒は皆運動場に出ていたのに、どこかの教室から「大きな栗の木の下で～♪」と子どもたちの声が聞こえてきた…しかも、ピアニカの音色と共に !!! 急いで見に行ってみると、音楽担当であるモアウォ小学校の先生がピアニカでメロディーを奏で、それに合わせて子どもたちが歌を歌っていたのだ。この２つの出来事に私は何とも言えない感動に酔いしれた。その風景は、日本で行なわれているピアニカの授業の風景と何の変わりもないものだと思う。先ほど私は成功かどうか尋ねたが、この２つの出来事を心の糧に今回のプロジェクトに満足した。また、スポーツ指導に関しても小さな出来事だったが、こんなことがあった。帰る前の日に、家の近所の子がドッジボールトーナメントの１位の賞品であるミサンガを腕に付けていたので「勝ったんや！良かったな。でも、今度やるときは皆だけでできる？私たちが帰ったらできひんやろ？」と少し意地悪な質問をしたら、その子は「できるよ！だって明日するもん !!!」と自信満々に笑顔で言ってきた。一瞬、本当かなって思ったけど、彼女のその一言がとても微笑ましかった。そして、私はニアスを飛び立った。

参加動機の１つである昨年の防災教育の継続の確認をするのは難しかった。しかし、ホームステイ先で、あるハプニングがあった。私が気楽に「アダ　グンパー（地震だー）」と言ってみると、ファミリーのデッディ（長男の名前）が「ジカ　グンパ　トゥルジャディ　リンドゥンギ　クパラ（地震の時は頭を守る）」と元気に返してくれた。それを聞いて私は、昨年、私がファミリーの家で、防災教育の劇の中のセリフで「地震が起こったら頭を隠す」というフレーズを何回も言っていたのを思い出した。それをデッディが覚えてくれていた。私は実際に継続の確認ができなかったと思う。しかし、そのデッディの一言で私は満足できた。また、自分でその現場を見たわけではないが、ニアスからメダンに帰る飛行機の中で「実際に地震が起きたときに防災教育が活かされている」と先生から聞き、嬉しかった。今回の情操教育も現地の先生や子どもたちが１人でも少しのことを覚えていて欲しい。現地のニーズにもよるが、それが種となり集まったとき、やがて、情操教育は続いていくのではないだろうか。

ホームステイがこのプロジェクトのもう一つの大きな活動である。現地の人と同じ屋根の下で毎日を過ごすことにより、文化や言語に親しむ近道でもあり、貴重な体験である。しかし、僕にとって昨年と同じホームステイ先だったので特に緊張することもなかった。懐かしい風景、そして、昨年より一段と整備された道を快適に走り、モアウォ小学校に着いた。ホームステイ先との対面式では教室に入るとすぐに、昨年、別のメンバーのホームステイ先だったバパッ（父）が名前を呼んでくれたことが

嬉しかった。席に着き、辺りを見回すと…居た!! 僕のパパッだ。家ではテンション高いのに皆の前ではシャイなパパッは、目を合わせる度にニコッと微笑んでいた。活動の打ち合わせがあったのでパパッには先に帰ってもらい、僕は記憶を頼りに一人で家に向かった。家に着いて思ったことは、少し家が豪華になっていた。まず、ベッドが1つ増えていたこと。もう1つは、コンクリートの床だったお風呂が綺麗なタイルの床になっていた。また、ホストファミリーの家ではないが、町ではパソコンも普及していて驚いた。整備された道、普及するパソコン…そして、まだユニセフの施設もあり、ニアスはとても発展していた。そんな中、何よりも驚いたのが子どもたちの成長だ。昨年は太っていたデッディが見違えるほど痩せていた。また、一番下のノヴールは昨年は生後10ヶ月ほどでまだ歩けなかったし、私が近づくとすぐに泣いてしまう子だったのが、今年はよく歩き回るし、私が持って行ったドラえもんのぬいぐるみをボール代わりにして私とキャッチボール(?)みたいな遊びを一緒にして、とてもなついてくれた。もう1つ大きなハプニングがあった。それは、ホストブラザーとしてファミリーが増えていたことだ。しかし、そのホストブラザーが言うことを聞かなく、私の私物をカバンから勝手にとって使用したりしていて、注意するのに苦労した。また、軽くインドネシア語の授業を受けていたので言葉が理解でき、分かるという良い点もあれば、分かってしまうという悪い点もあった。例えば、私の持っているものに向かって「それ、ちょうだい」と言って来て「ダメ」と断ると、「悪い人!ケチ!!」と子どもたちが言っていたのが分かってショックだった。

今回、改めてインドネシアに行き、「豊かさとは何だ?」と考えた。日本人は豊かであるのか?逆にニアスの人びとは豊かではないのか?確かに日本はいろいろな家電製品やコンビニなどの生活用品や施設は充実していて便利な生活を過ごすことができていると思う。しかし、「心」の豊かさはどうだろうか?時間に追われ、我を失い、「富」という豊かさを求め働く人や近隣とのコミュニケーション不足、自殺者数の増加など、それで豊かといえるのだろうか…一方、ニアスでは冷蔵庫やエアコンなどはなく、お湯が出る風呂なんかもない。確かに私たちの生活から考えたらありえないと思う。しかし、現地の人びとは何不自由なく暮らしていて、食料も庭に生えている果物や家の裏の小屋の豚や鳥を調理して、自然の恵みを肌で感じ生活している。心の豊かさを持っていれば、富の豊かさの必要限度が分かる。逆に、富の豊かさを1度手に入れると大切な心の豊かさをどこかに忘れてしまう…このようなことからも改めて自分の暮らす日本について考える機会になる。2度目の「国際参加プロジェクトinインドネシア」だったが、新たな発見も多々あり有意義なものであった。まだ海外に行ったことが無い方、また、先進国にしか行ったことが無い方、一度、ニアスのようなところの生活に触れてみてはどうだろうか?「国際参加プロジェクト」には是非、参加してほしい。まちがいなく、何かを感じ、何かをしたくなると思う。

最後になりましたが、事前研修から今も協力し合ってきた仲間やスタッフ含め地域研の方々、インドネシアでお世話になった人びと、今までのプロジェクトの先輩の皆様、家族、プロジェクトにおいて関わった全ての皆様…トゥリマカシー バニャッ(たいへん ありがとうございました)!!!

私のウルルン滞在記

井上　美優
(欧米学科　1年)

インドネシアから帰ってきてから思うことは「インドネシアが大好きっ」ということです。常時インドネシアに触れていたいので『指差し会話帳』をかばんに入れていたり、専攻したフランス語に負けないくらいインドネシア語の勉強をしたり…私の生活の中にインドネシアが住みついてしまいました。しかし、インドネシアから帰ってきてからの一週間くらいはモヤモヤ気持ちになっていました。インドネシアに行って、自分は何を得たのか、これから何をするべきなのか、誰に会いたいのか…ただ、ボーッと考えていました。時がたつにつれて、インドネシアの人びとやホストファミリー、日本の地元、家族、プロジェクトメンバーが恋しくなってきました。このプロジェクトは私にとって大切なものを再確認させてくれました。そんなインドネシアを「出会ウ」、「泊ル」、「見ル」、「体験(ン)」(ウルルン)で紹介したいと思います。

「出会ウ」:インドネシアで出会った人たちはみんな気さくで笑顔が素敵な人ばかりでした。子どもから大人まで一緒になってわいわいしていて日本ではめったに見ることがない光景でした。モアウォ小学校の児童たちはいつも元気で挨拶をしてくれたり、私の名前を呼んでくれたり…しかし私たちの心配をしてくれたり、手伝ってくれる優しい一面もありました。散歩をしていたら「ヤホブ!(こんにちは)」といって声をかけて

くれたり、インドネシア語を話せない私のために、『指差し会話帳』を使ってコミュニケーションをとってくれたり、ご飯をご馳走してくれたりしました。私はニアスに来て、人と話をしたり、挨拶をすることが本来大切だということに気づきました。ある意味、人間好きになりました。

「泊ル」：私がホームステイをさせていただいた家はお母さんが怖かったですが、お父さんはとても優しかったです。毎晩コーヒーを飲みながら日本語を教えたり、歌を歌ったり、写真をみたりしました。従兄弟に夜バイクで市場に連れて行ってもらい、ちょっと不良気分を味わいました。また、泊りに行って星空を見ながら語ったこともいい思い出です。

「見ル」：ある日、お兄さんに山へ連れて行ってもらいました。なんと、そこからはモアウォ小学校の一帯から海まですべてが一望できたのです。そのきれいな景色に言葉を失ってしまいました。しかし、きれいに見える海は近くに行ってみると…島崎藤村の詩の一節、「名も知らぬ　遠き島より　流れよる　椰子の実ひとつ」の様にココナッツの実が転がる…様な海岸ではないのです。見渡せばドリアンの皮皮皮！そしてゴミ！正直ショックを受けました。もっと環境について考える教育が必要だと感じました。

「たいけン」：このプロジェクトではメインの活動として初めて教える立場となってモアウォ小学校の児童にドッジボールを教えました。私自身も全ての流れが把握できていなく混乱し、子どもたちやメンバーに迷惑をかけてしまいました。毎日が反省と不安と謝る気持ちでいっぱいでした。しかし、子どもたちが楽しんでいる姿やだんだんとルールを理解して自分から動いてくれる姿を見ていたら「がんばろう！」という気持ちになりました。特に嬉しかったことは、グラウンドで子どもたちが線を引いたり、石拾いを手伝ってくれたことです。しかし気になったことは私たちが帰った後もドッジボールが続いているかどうかです。これが達成していなければ成功したとはいえません。その成果を見たいので来年も行きたいと考えています。

最後に、このプロジェクトに参加したことで多くの人に出会いました。特にプロジェクメンバーは家族のようです（私は“インネシファミリー”と呼んでいます）。本当にみんなに会えてよかったです。私たちは最初から問題を抱えて周囲から見たら不安なメンバーだったと思います。しかし、このメンバーでよかったです。テリマカシ　バニャッ！（ありがとう）そしてお世話になった先生方ありがとうございました。そして…インドネシア、ありがとう！大好きじゃー（広島弁）！

指導することの難しさ

井元　傑
（英米語　２年）

私が「国際参加プロジェクト」に参加させて頂くのは、今回で２回目となりました。昨年の第７回「国際参加プロジェクト」では、インドネシアのニアス島で小学生を対象に防災教育を行わせて頂きました。そして、今年の第９回「国際参加プロジェクト」では、私はスポーツ指導としてドッジボールを担当させていただきました。

今年の活動は、昨年の防災教育以上に苦労しました。なぜなら、スポーツ指導では、子どもたちは当然ながら、現地の先生方と一緒にスポーツを教えなければならなかったからです。研修をする際に、メンバー内で意見がまとまらないことが何回かありました。結局、色々あり本腰を入れて準備を始めたのは、出発する約１ヶ月前ぐらいからだったので、非常に焦りましたが、何とか準備を終わらせ出発することができました。

インドネシアの空港に着いたのは夜遅くだったので、昼間の活気は見られませんでしたが、あの独特の匂いは健在で、とても嬉しくて自然と笑みがこぼれました。翌日は朝からヌルアディア小学校を、昼からは在メダン日本総領事館を訪れました。ヌルアディア小学校では、スポーツ班は雨が降ったときのことを想定して準備しておいた、新聞紙を丸めて作成した玉を使った的当てを行ないました。子どもたちが私たちの言うことをしっかり聞いてくれ、楽しみながら活動してくれたので、問題なく終わることができ、インドネシアでの順調なスタートを切ることができたと思います。

ニアス島に到着したときはとても興奮しました。ニアス島は道路舗装も進み、市場なども非常に活気があり、またユネスコの支援所も大きくなっており、昨年とは見違えるほどでした。モアウォ小学校に降り立った時、ボソボソと子どもたちが私の名前を呼んでくれた時は、本当に感動しました。ホームステイ先の発表の時、私は昨年と違う家にホームステイをすることにしていたので、とても緊張したのを今でも覚えています。私の家族はパパッ（お父さん）、イブ（お母さん）、小学生１人と３歳の男の子が１人の４人家族でした。次の日からは、授業初日なので家族との交流はほどほどにして早めに寝ました。

モアウォ小学校の活動では、初日、２日目の指導は何とか上手くできましたが、３日目の指導はとても苦労し

ました。特に5年生はどのように接していいか分かりませんでした。厳しいことをいうと反抗するし、優しくするとなめた態度をとられました。その時、指導をする難しさを痛感しました。腹が立ってイライラしたこともありましたが、楽しむ気持ちを持ち続けたいと常に思いながら、苦悩を乗り切りました。

最終日の成果発表会は、正直、100パーセント満足することはできませんでした。なぜならば、私には先生方や教育省の方々がほとんど成果発表会を見ていないように思えたからです。その時、「私たちの帰国後もドッジボールを継続してくれるのだろうか」という不安がよぎりました。子どもたちが娯楽としてドッジボールをやってくれるとは思いますが、現地の先生方が授業の一環としてドッジボールをすることは難しいのではないかと感じました。ただ、子どもたちはドッジボールという初めて体験するスポーツを数日教えただけでルールまで覚えて、楽しんでドッジボールをしていたので、とても達成感を感じました。

私はインドネシアという国に2年連続で行かせて頂いたことで、自分が将来何をしたいのかが具体化されたように思います。そして、かけがえのないたくさんの仲間ができました。そのような点で「国際参加プロジェクト」はすばらしい教育プロジェクトです。このプロジェクトは私の人生に何かしらの影響を与えると思いますし、また、この経験は今後社会に出た時に私の支えとなってくれると思います。私はこのプロジェクトへもう参加することはできないですが、来年は自分の力で海外へ行き、バックパッカーなどとしていろいろな体験をしたいと考えています。

最後に、倉光先生、山本先生、深見先生、澤山先生、住原先生、椋野先生、牧山さん、その他ご協力頂いた先生方、本当にありがとうございました。

My Dream Comes True

岡本　暁子
（ドイツ語　4年）

大学とは「夢を見つける場所」とよくいわれているが、私にとっては「夢を叶える場所」となった。

なぜなら今回の「国際参加プロジェクト」に参加し、夢だった「国際協力」への第一歩を踏みだせたからである。学費の貯金から10万円をプロジェクトに費やしたおかげで、苦労も多々あり、一時は本気で辞退を考えた。そんな時、倉光先生と牧山さんが暖かいエールを送って下さり、参加を決意した。今では**インドネシアで活動ができて本当に良かった**と心から思う。

今回、インドネシアの小学生にドッジボールを教えて、改めて情操教育の重要性を実感した。私たちが小学生の頃、体育や音楽の授業が当たり前にあって、知らぬままに情感豊かな心・健全な体を身につけることができた。だからこそ、プロジェクトの準備中は凄く不安だった。「本当に私はきちんとした授業をできるのか？」とか、「ただのボール遊びになったらどうしよう？」など、そんな気持ちがあった。けれど、モアウォ小学校の子どもたちのパワーと笑顔、ニアスの灼熱の暑さに、私のモヤモヤした感情は吹き飛ばされた。子どもたちが一生懸命ドッジボールに取り組んでくれるから、ただそれに応えたかった。

授業をしていて、一番嬉しかったのは、日に日に子どもたちの成長ぶりが窺えたことである。例えば、投球フォームが改善され、球威がついた。また、女の子もボールを怖がらず、積極的に参加してくれるようになった。試合で勝った子どもたちのガッツポーズ、負けた時の悔しそうな表情、ボールをかわすスリル感。深見先生もおっしゃっていたが、あれこそがスポーツの醍醐味だった。「成果発表会で試合をする」という目標も達成され、熱狂的な日々は一瞬で過ぎ去った。

もちろん良かったことばかりではない。後悔もある。それは「現地の先生たちともっと交流し、協力し合えたのではないか？」ということである。これは春学期の澤山先生による『国際協力論』で習った「カウンターパートとの技術協力」のことであるが、自分たちの指導案に集中しすぎて、あまり実践できなかった。私たちはあくまでも、技術を提供しにきたのに、授業では主役を演じてしまった。今後、私にできる「技術協力」を実践する際には、必ず現地のカウンターパートの存在を忘れず、協力し合っていきたい。

最後に、今回のプロジェクトに参加したことにより、たくさんの優しくて素敵な人びとに出逢えたこと、そして貴重な経験をさせて頂いたことを、本当に嬉しく思う。もしこのプロジェクトに参加せず、インドネシアにも行かなかったら、私はどんなに平凡で退屈な大学生活・夏休みを過ごしていたのだろう。想像するだけでも恐ろしいのでやめておく。在学5年のドイツかぶれな私は、このプロジェクトを通して、新たな夢を見つけることができた。きっと、もっと若ければ、また違った価値観や夢に向かうのかもしれないが、この年齢＆このメンバーでプロジェクトに参加できたことを、本当に幸せに思う。

お世話になった先生方、愉快な学生メンバー、そして天理大学が大好きで、本当に感謝しています。みなさん、ありがとうございました。

家族の輪

岡本　美和
（英米語　２年）

「他者への献身」という建学の精神を掲げた天理大学で、私は今、人のために何ができるのだろう…。そう考えていた頃に、このプロジェクトを知り、きっかけになればと思い参加を決めました。４年前のスマトラ沖大地震のとき、テレビでインドネシアの津波の被害を見て知ってはいたのですが、実際に自分がその人たちのためにしたことといえば、数百円の募金くらいで、他人事のようにしか見ることができていなかったように思います。しかし、あれから４年が経ち、人びとの関心が薄れていく中で、こうして今も継続してニアスへの支援を行なっている天理大学の活動を知り、本当に誇らしく、私もインドネシアの人のために何かできれば・・・という思いでした。

けれど実際、準備活動に入り、子どもに一からドッジボールを教えるということを考えながらの作業は思った以上に大変でした。また、私の行動や言動のために、たくさんの方に迷惑をかけたこともありました。毎日残って作業をしてくれる仲間にもアルバイトばかりの私は迷惑をかけてばかりでした。「人のために」と思って参加しているはずが、逆に人に迷惑ばかりかけている自分に腹がたち、「こんな状態で参加していいのだろうか」とギリギリまで何度も参加を迷いました。しかしそんな私を責めることなく、会うといつも笑顔で話しかけてくれたり、相談に乗ってくれる先生方や仲間のお陰で、気持ちを切り替え、「微力でも現地では自分のできる精一杯のことをさせてもらおう！」と思い直すことができました。

そしていよいよインドネシアへ・・・。初めての海外、初めてのホームステイ、初めてのドッジボール指導、何もかもが初めてで不安とドキドキでいっぱい・・・のはずが、気づけば飛行機の中で昏々と眠り続けていました。目が覚めると、そこは異国の地・インドネシア、日本人とは少し顔つきが違う人たちがたくさんいて、聞こえてくる言葉も全くわかりません。「これが海外かぁ・・・」と胸を躍らせました。きちんと覚えていたインドネシア語といえば「テリマカシー（ありがとう）」くらいで、そのときの私は完全に言葉の壁を甘くみていました。

ニアス島に着き、活動の拠点であるモアウォ小学校へ向かいました。そこには募集説明会の映像で見たキラキラ輝く笑顔の子どもたちが待っていました。学校中で私たちを歓迎してくれ、子どもたちは人懐っこく周りによってきてくれました。そしていよいよこのプロジェクトの一番の目的となるドッジボール指導が始まり、子どもたちはみんな初めて見るドッジボールという競技に興味津々で一生懸命に練習をしてくれました。はじめの頃はやはり言葉の壁が大きく、注意したくてもできない、身振り手振りだけでは伝わらない、北スマトラ大学からきた通訳の学生に頼ることしかできず、もどかしい気持ちでした。しかし日を追うごとに、はじめは形にならなかったボールの投げ方や捕り方もだんだんと形になり、線を出ない、ワンバウンドなどの細かいルールも一人一人が自分で注意してできるようになりました。ゲームをしても、子どもたちが積極的にボールを捕りに行く姿や男の子が女の子を守る姿が見られるようになり、本当に嬉しく思いました。成果発表会でのゲームも、どのチームも一生懸命試合をしていて、勝てば溢れんばかりの笑顔で喜んだり、負けるととても悔しそうに「もう一回やりたい！」と訴えてきたり・・・そこまでみんながドッジボールという新しい競技を楽しんでくれたことがとても嬉しかったです。もちろん炎天下の中での活動中、誰もがしんどい思いをしたと思います。反省もたくさんありました。けれど、ドッジボールを通じて子どもたちの最高の笑顔を見られたこと、指導中に雨が降ることなく無事に４日間を終えられたこと、そして何より仲間同士で励まし合い、最後までやり遂げることができたことをとても幸せに思います。

また、ニアスでの活動中、小学生２人の姉妹の家にホームステイをさせてもらいました。２人は私を日本語で「オネエチャン」と呼んでくれました。ホームステイ先のお母さんもお父さんも私をお客さん扱いすることなく、子どもと同じものを与え、同じ愛情を与えてくれました。バイクでいろいろなところに連れて行ってくれ、たくさんの人を私に紹介してくれました。そして近所のどの家に行っても、イスを出して、私のつたないインドネシア語にニコニコと耳を傾け、そして私に分かるようにと、英語や辞書を使っていろいろな話をしてくれました。ホームステイ先だけでなく、町全体が私たちを家族のように迎えてくれているように感じました。初めてのホームステイで、文化の違いや伝えたいことが伝わらな

い、向こうの言っていることが分からない・・・と言葉の壁に悩み、涙が出ることもありました。家族として迎えてくれたホームステイ先の家族には本当に迷惑をかけてしまったと思います。しかし別れの時、「ここは美和の家だからまた帰ってきなさい」とお父さんが一生懸命辞書を使って言ってくれた大きな愛情に、小さなことにくよくよしていた自分をとても恥ずかしく思いました。

このプロジェクトを通し、本当にたくさんのことを学びました。何より、遠く離れた高知からいつも応援してくれていた自分の家族、一緒にインドネシアへ行った仲間という家族、インドネシアで温かく迎えてくれた大きな家族・・・本当にたくさんの方々の愛情や優しさのお陰で今があることに気づかされました。心から感謝しています。これからも、このプロジェクトでの経験や中での反省を生かし、恩返しの意味でも、他者に尽くせる人間になれるよう、勉強し行動していきたいと思います。そして世界中にもっともっと家族の輪を広げていきたいです。本当にありがとうございました。

自分らしさ

笠木　和樹
（タイ語　4年）

私が天理大学に入学したのは4年前のことである。入学当初は大学生になれば友達も増えて世界が勝手に広がるだろうと思い、日々の生活を送っていた。だが、私の思いとは正反対であったのだ。友達はできるがなぜか空虚感がすごくあった。そして、遊びの幅は広がるが自分の幅は狭かった。今思えば原因は私自身にあった。友達に話しかけることができなかった。自分のためになることを頭では考えるが、実行に移せなかった。すべて私に積極性が欠けていたからなのだ。そんな中、気がつけば4回生になり、大学に入って「これやっ！」と思えることが見つかってなく、いろいろな悩みも抱えていた。そんな時一枚のプリントを目にしたのだ。それは天理大学の特徴を含んだ教育プロジェクトだった。その内容というのはインドネシアのニアス島の小学校でボールを使用したスポーツ指導と歌を中心とする音楽指導を行なうことであった。こんな経験ができるなんて夢にも無い話だ。「これやっ！」と私は心で叫んだ。巡り合ったのだ。人生のターニングポイントになるであろう体験に。そして、第9回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」の参加者募集説明会に足を運んだ。そこで概要と参加者の体験談を聞いたのだが、前回の体験談を語ってくれた子たちは2回生の子だった。何よりも私よりも一回りも二回りも大きく見えて、輝いていた。すごく羨ましくもあり、同時に嫉妬心も芽生えた。しかし、そこで劣等感に見まわれても仕方ない。彼等が行なってきた活動とは本当に素晴らしいものだったから、このような気持ちになったのだろう。そして、迷うことなくプロジェクト参加者に応募して18名のメンバーの一員となりインドネシアでの活動に向けて準備が開始された。

事前準備ではスポーツ班と音楽班に分かれたのだが、私自身小学生の頃から高校時代までサッカーを12年間してきたため体力には自信があった。だが私は音楽を選んだ。それにはいろいろな理由があるのだが、第1の理由として、私はピアニカをアコーディオンと勘違いをしていたので触れたことのない楽器に触れてみたかったのだ。しかし楽器の実物を見て愕然とした。鍵盤はあるがチューブを使用するもので小学生の頃、音楽の授業で使用していた楽器だった。第2の理由としては、苦手な方を選んで活動をしたかったからだ。なぜなら元巨人投手桑田真澄選手が出した一冊の本に記載されていた一文をかっこいいと思ったからだ。それは、「もし人生に易しい道と険しい道があるならば僕は迷うことなく険しい道を選ぶ」という内容だった。私は自分に優しい部分が多く、少しでも自分に厳しくなりたかった。だからそのきっかけになればいいと思い、音楽指導を選択した。そして音楽指導を選択した学生は私を含め7名だった。準備には考える時間や作業時間、そして情操教育ということで先生としての授業の進め方などいろいろなことをやらなければならなかった。尚且つ時間がない状況での準備なので効率よく準備をしたかったのだが、物事はうまいこと進まない。帰国しても尚どのように準備していたらスムーズにできたのか悩んでいる。

毎回プロジェクトではリーダーを決める。私は本当に頼りなく、誰かの後を付いていくか、一人で気楽に過ごしたいと考えているので、リーダーには向いてない人材である。だが、ここでプロジェクトに対する心意気に転機があった。私がリーダーという重役に任命されたのだ。私は先生にも認められるぐらい頼りない子で、私の補佐を3人も付けてくれた。そして何より救いになったのはリーダーの役目としての明確な要望であった。「みんなを明るくする。」過去8回のプロジェクトでリーダーとなった方々に「こんな楽な要望があったのかな？」と疑問を感じたが、メンバー全員が明るければ必然と良い方向に進んでいく気もしたし、仲間の輪を掛け持つため

の円滑油の役割を果たしたらいいのだと思い、私はリーダーを引き受けた。だが、いざリーダーとなって使命感も生まれ、自分の色を出して行こうと思うのだが、やはりいろんな事を考えると苦痛だった。とはいえ、このプロジェクトで巡り合った仲間というのは個々の考え方は違えど、志すことは同じで、目的も同じ、気持ちの通じ合いがあった。この支え合いがなかったらプロジェクト期間中をリーダーとして務めることができなかったと思う。

いざモアウォ小学校の生徒を目の当たりにすると、サンサンと降り注ぐ太陽の光りをものともせず、元気いっぱいで小学校のグラウンドを駆け廻る子どもたちの光景は懐かしさがあった。そして同時に体力の心配をしたのはいうまでもない。ニアス島ではホストファミリーが私たちを受け入れて下さったのだが、ホストファミリーの目配り、気配り、心配りというのは本当に心を穏やかにしてくれるもので何の不自由もなく生活を送ることができた。そして、今回の目的である情操教育ではモアウォの小学生の元気の良さに圧倒されつつも、私たちは必死になって小学生に日本の音楽を教えた。それと引き換えに、生徒は笑顔で答えてくれた。

私はこのプロジェクトを通して出会いの大切さを実感した。価値観の共有ができた仲間たち。プロジェクトの成功を祈りメンバーを信じて見守っていてくれたスタッフ。短い期間でも共に笑い助けてくれた北スマトラ大学の学生たち。いつも私に気をかけてくれるホストファミリー。太陽に負けない輝きを放つ笑顔のモアウォの小学生。天理大学関係者の方々。このプロジェクトに携わってくださった方々にこのような貴重な体験をさせていただき、誠にありがとうございます。私はこの体験を生かし人の役に立てる仕事に就きたいと思う。

人と人のつながり

北村　和恵
（ブラジルポルトガル語　２年）

「人のために何かしたい！」、「世界のことをもっと知りたい！」と思って、このプロジェクトに参加した。だから、事前活動も精一杯頑張ろうって思っていた。しかし、いざ活動が始まっても、何をしたらいいのとか、どういうことをすべきなんとか分からなくて、あまり準備が進まないまま７月に入った。７月に入って話し合いがあり、その結果、メンバーは、積極的に自分の役割をするようになった。インドネシアに行くまでの日は、毎日学校へ来て、ドッジボールのデモンストレーションの練習を何回もした。最初は、ドッジボールをどのように教えるかということが全くイメージできていなかったが次第に形となってでき上がってきて、一人一人がどんな風にすればいいのか分かるようになるにつれて、チームの雰囲気がすごく良くなっていった。

しかし、ニアス島での初日の授業は、頭で考えていたより、行動に移すことができず、授業が上手く進まなかった。だから、授業終了後、メンバーと深見先生でその日１日の授業に関しての反省会をした。その結果、２日目からは、授業の中でメンバー同士、声を掛け合い、積極的に動くように心がけ、徐々に授業らしくなっていった。子どもたちもドッジボールというスポーツを理解し始め、試合の中で、喜怒哀楽を示してくれるようになり、見ているこっちまでもが普通に応援してしまうほどだった。

ニアス島の子どもたちはみんな、人懐っこかった。私たちの顔と名前を覚えてくれて、毎日笑顔で寄って来てくれるのが嬉しかった。ある子は、私がインドネシア語をできないことを理解してくれていて、何も会話ができないけど、表情や手で表現してくれた。何かを伝えようとしてくれているのが嬉しかった。こんなとき、「自分が喋れたらなぁ」と思うことが多々あった。

私のホームステイ先は、６人兄弟、８人家族の家だった。さらに、近所の子が遊びに来たり、親戚の人が来たりで常に家は賑やかだった。そして、人が来るたびに、私は慣れないインドネシア語で挨拶をし、写真を一緒に撮るのが２日に１回のペースであった。あまり喋れなかったけど、いろんな人に接することができてよかったと思う。ブレーキのない自転車に乗ったり、明らかに定員オーバーのバスに乗ったり、ココナツの実を採るのを間近で見たり、教会に連れて行ってもらったり、珍しい経験ができたこともよかった。日本のように裕福じゃないし、便利でもない。停電だって当たり前のように毎日起こる。でも、停電になったときは、兄弟で同じ部屋に集まって、懐中電灯の微かな明かりをつけ、喋ったり、折り紙をしたり、かくれんぼっぽいことをして遊んでいるので、停電であることを忘れるぐらいだった。

ホームステイ中、いいこともいっぱいあったけど、正直、しんどいと思うこともあった。でも、メンバー同士の家が近かったから、話を聞いてもらい、気分転換することが出来たので、「また頑張ろう！」って思えた。

この活動を成功させるまでには、メンバー同士、意見

がぶつかり合ったこともあったが、その分、相手のことを知る機会にもなった。一人ではできないことも、メンバーの力を借りることによって成功する。困ったときは助けてくれて、支えてくれたメンバーと、何もできない私を笑顔で受け入れてくれたホストファミリー、道端で会えば挨拶してくれるニアス島の人たち。私は、このような機会を与えてもらい、活動を通して、いろんな人たちと関わることができ、学べたことをうれしく思う。

素敵すぎるインドネシア

児玉　佳鈴
（ブラジルポルトガル語　２年）

自分を変えたくて、海外に行きたくて、ボランティアがしたくて参加したこのプロジェクト。初めての海外だったけど、不安とかは全然なくて、むしろすごくワクワクしてた。見るものすべてがすごく新鮮で、全部キラキラ輝いて見えた。「ああ～あたし、外国に来たんだ」って思った。

特にニアス島での日々はとっても素敵すぎた。暑さと日差しの強さ、夜寝ている時の蚊の攻撃、慣れないトイレとマンディ（水浴び）、毎日の辛い味付け…日本とは違うことにストレス溜まったけれど、私はそれ以上にこの島にたくさん癒してもらった。

ニアス島の自然、とりあえず「ありがとう」と叫んでくる島の人、「写真を撮れ」と言ってくる子どもたち、ホストファミリー。午前中に小学校でスポーツ指導をして、お昼にうちに帰ってご飯食べて、昼寝したり、マンディしたり、ジャランジャラン（散歩）に行ったり…。夜は夜で近所の家に遅くまで居座って大人たちは喋っているし、子どもたちは勝手によそのうちに出入りしてるし…。ニアス島の人たちの生活はホントに自由で、スローライフってこういうのなんだなって思った。

いつもどこへでもついてきて、私の面倒をみてくれるホストシスターたちは兄弟姉妹みんな仲良くて、お互いに思い合っていて、家族みんなが好きだって言っていた。そんな姿に感動したし、彼らを見ていたら心が暖かくなって、やさしい気持ちになれた。パパッ（お父さん）とイブ（お母さん）もすごく優しくて面白くて、このおうちにホームステイできて、みんなと家族になれて、本当によかった。

パパッはキリスト教の神父さんだから、朝、学校に行く前に聖書を読んだり、ご飯の前にお祈りをしたり、夜の集まりに行ったり、日曜日の礼拝にも行った。私はキリスト教じゃないけれど、なぜか一生懸命何かを祈っていた（笑）。歌をうたうのもすごく楽しかった。ただ、一番初めに夜の集まりに行った時、日本人の私を連れてきたことで、ホストシスターは周りの友達にからかわれたみたいで泣いていたけれど、言葉が分からないから何も言ってあげられなくって、何を言われていたのかも分からなくってすごく悔しかった。

言葉の分からないもどかしさはいろんなところで感じた。特に一番困ったのは、モアウォ小学校での授業だった。簡単なインドネシア語は覚えていたけれど、子どもたちはなかなか言うことを聞かないし、違う学年の子どもも混ざってくるし、とにかくとても大変だった。私たちの通訳をしてくれた北スマトラ大学の大学生がいなかったら、きっと、いや絶対に授業は成り立たなかったと思う。こんな私だったけど、１週間いるうちに本当にほんの少しだけどインドネシア語が分かるようになって、言葉が通じた時の喜びと語学の楽しさを知った。
ドッジボールの指導は思ったよりも小学生がボールを投げたり捕ったりができていて、初めはみんなボールの投げ方も捕り方もバラバラで、能力にも差があったけれど、きっとうまくいくだろうと思った。でも実際はそんなことなくて、投げ方一つとっても、投げる手とは反対の片足を上げて反動をつけて投げることなど、正しいやり方を教えるのにはとても手こずった。一生懸命、言葉であったり、実際にして見せたりして教えた。ゲームの練習にしても、ルールをしっかり伝えること、ルールを守らせることがなかなかうまくいかなかった。お菓子を食べながら授業を受けていたり、他の学年の子が侵入してきたりもした。ニアス島の人たちには細かいことは全然気にしない大らかな感じがしていたから、だんだん不安になってきていた。

けれどそれ以前に私自身に問題があった。私は人前で積極的に動くことが恥ずかしくて、大きな声もあまり出せなかったし、子どもたちにしっかり指導もできていなかった。やらなきゃいけないとわかっているのに、なかなかできない自分との戦い。でも、「このままじゃせっかくインドネシアまで来たのに何も変わらないじゃん」と思って、少しずつ頑張ってみた。そしたら慣れてきてあまり恥ずかしくなくなっていった。メンバーからしたら、何も変わってないって思われちゃうかもしれないけど、このことで少し自信がついた気がする。最終的に子どもたちもドッジボールの面白さを分かってくれたみたいですごく嬉しかった。

ニアス島にいる間は、日本にいる時に散々悩んで悩んで悩んで…していたような悩みなんか一切思い浮かぶことすらなかった。ゆったり自由に暮らして、それでいて、一日一日、生きているって実感があった。ニアスでは自分らしくいられたんじゃないかな。日本はニアスよりずいぶん都会だし便利だけど、住みにくいところだなって思った。もう…ニアスはホントに素敵すぎる。

でも、ニアス島とさよならしてメダンに戻って、悲しい現実を目の当たりにした。イスラム教の寺院では物乞いをする人たちがいた。道路では子どもたちが車の中の人に向って一生懸命何かを売ろうとしていた。ニアス島の人たちとは明らかに違う生活。これが世界の現状なんだろうなって思った。悲しかったけれど、見れてよかった。

このプロジェクトに参加して、地球上に２つめの家族ができた。かけがえのない仲間ができた。知らなかった、見たことのなかった世界を見ることができた。いろんなことを感じ、考えることができた。食べたことのない食べ物を食べることができた。新しい自分に出会えた。生きるということを実感することができた。このプロジェクトに参加できて、本当によかった。ありがとうございました。

ありがとうでいっぱい

後藤　美佐
（ブラジルポルトガル語　２年）

私がこのプロジェクトに参加したのは、一回生のとき、このプロジェクトに参加されたある先輩から話を聞いたのがきっかけでした。私は、その話を聞き、とても感動し、心に何か熱いものを感じました。そして、「じっとしていたらもったいない！自分で行って自分の目で見て、自分の肌で感じ、そして今、人のために自分ができることを少しでもしたい！」と思い、参加することを決めました。私は、今回このプロジェクトに参加して、日本では経験できない多くのことを経験し、そして、本当にいろいろなことを学びました。今、このプロジェクトに参加して本当によかったと心より思います。

私たちのプロジェクトは、現地に赴く前の３ヶ月に渡る事前研修から始まりました。この事前研修では、インドネシアでの活動をよりよいものにする為に、メンバーが一緒になって、一生懸命に取り組みました。途中、辛くて何度か逃げ出したくなったときもありましたが、その度に先輩や友達、他のプロジェクトのメンバーに助けられ、なんとか乗り切ることができました。

そして事前研修を終え、いざ現地へと赴き、メインであるモアウォ小学校でのドッジボール指導。むこうの子どもたちはドッジボールを知りませんでした。したがって初日は、ドッジボールのデモンストレーションをして、ドッジボールとはどういうものかを見せました。そして、徐々に練習を重ねていくうちに、最終日にはトーナメント形式でゲームもできるようになりました。暑い中にもかかわらず、子どもたちは楽しそうで、元気にドッジボールをしていて、その姿を見て本当に嬉しかったです。

ニアス島にいる間、私たちはそれぞれホームステイをさせて頂いたのですが、私にとってこのホームステイは一生忘れられないかけがえのない思い出となりました。ホームステイをする前まで、私はこのホームステイというものが本当に不安でたまりませんでした。というのも、以前このプロジェクトでインドネシアに行った人たちから話を聞くと、「絶対お腹壊すから！」といわれ、特にマンディ（お風呂）に関しては、「マンディをするときに使う水の中には、虫がいっぱいいるから」とか、ある先輩は「マンディの桶の中で魚が泳いでいて、マジでびっくりした！（笑）」などなど、行く前からいっぱい脅されていました。知っている人は知っているのですが、私は虫（小さいのも大きいのも関係なく）が大の苦手です。そして、若干（？）神経質で潔癖なところがあります。自分でもこのことは嫌というほど十分承知していたので、本当に現地の人たちと一つ屋根の下で、仲良く同じ生活が送れるのかどうか、とても心配でした。ニアス島にいる間、はたしてマンディができるのかどうか…。しかし、実際に生活してみると、最初は抵抗すらあったものの、徐々にインドネシアの生活に慣れていき、しまいにはホストブラザーに不思議がられるほど長い時間、マンディをしていました。

ホームステイ先の家族とのコミュニケーションについてですが、ホストブラザーが片言の英語を話すことができました。私はインドネシア語はまったくできないのですが、英語は…全くできません。したがって、この期間中『旅の指差し会話帳』は欠かせないものでした。家族のみんなはとても優しく、『旅の指差し会話帳』を片手に、意味不明な言葉を発してくる私に対して、一生懸命耳をかたむけてくれ、理解しようとしてくれました。ニアス島での活動は、午前中で授業が終了するため、午後は毎日フリーでした。毎日、学校から帰ってくるとマンディをし、お昼ご飯を食べ、ジャランジャラン（散歩）に出

かけました。道を歩いていると、どこからともなく「ありがとー！」という言葉が。こっちも一緒になって「ありがとー！」と言いました。ただそれだけのことなのに、とても楽しくて、自然と笑顔になっている自分がいました。会う人会う人に「ヤホブー！（ニアス語のあいさつ）」と声をかけると、必ず「ヤホブー！」と元気に返してくれる。私は今まで、あいさつがこんなにも楽しく陽気なものだとは知りませんでした。ジャランジャランから帰ってくると、ホストファミリーとの楽しいくつろぎの時間。ニアス島では停電がしょっちゅうあり、停電になるたびに１つのランプを家族みんなで囲んで、時間を忘れて長い間おしゃべりをしました。私は家族みんなで過ごすこの時間が大好きでした。そして、停電したときに見た空の星はとても綺麗で、涙が出そうになりました。ニアス島で過ごしたこの期間は、本当に素敵で、一生忘れることのできないものとなりました。ホストファミリーや近所の人たち、宗教とともに生きるニアス島の人は、とても温かく、明るく、そして笑顔でいっぱいでした。

人のために何かをしたいと思い、参加した今回のプロジェクトでしたが、逆にたくさんの人に助けられ支えられ、そして、本当に多くのことを教えてもらいました。このプロジェクトを通して、改めて「たすけあい」の大切さを学び、人は一人では生きていけないということを学びました。人は助け合い、共に支えあって、喜びを分かち合うものなのだということを。最後に、このプロジェクトで出会った、たくさんの素敵な人に、心より感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

A Simple Life

近藤　侑子
（中国語　４年）

ボランティアがどういうものかを知りたくて…今年やっと、このプロジェクトへ応募することができました。メンバーは殆ど後輩で、今まで後輩との関わりが少なかった私は正直、ボランティア云々以前に、まず彼らとのジェネレーションギャップが不安でたまりませんでした。音楽班のメンバーは事前研修の参加者含めて８人。事前研修では、何の歌を指導するのか、どのように指導するのか、事前に必要なものは、誰が何をいつまでに作るのか…等々、「こんな事までするの!!??」と、目からウロコなくらいの念入りな準備がなされました。ボランティアというものに幻想を抱いていた私の甘さや愚かさを思い知らされた３ヶ月間でした。流れるように時は過ぎ、あっという間に出発日はやって来て、気がつけば私たちは互いに、無いところを補え合える‘いい仲間’となっていました。私が心配することは何一つ無く、全て時間が解決してくれていたのです。

ニアス島での日々は素晴らしく、毎日がとても充実していました。ホストマザーの料理はとても美味しくて、風呂トイレにもすぐに慣れました。ただ、朝晩の水浴びには何度も心臓が止まりかけましたが…。毎朝５時に目が覚めて、水浴び、朝御飯、７時には学校へ。歌の指導に仲間たちと試行錯誤しつつ、何とか毎日の目標を消化して学校から帰ると、水浴びとついでに洗濯、昼御飯、昼寝をして、散歩や子供たちと遊ぶ、夕方水浴びして、夕御飯、９時には就寝…ゆったりした時間、シンプルな生活、純粋な人たち。人に会ったら挨拶を交わし、私が男の子と歩いているだけで、「Pacar(恋人)?」って聞いてきたり、こんな話で大人たちが盛り上がっていたり、よその家の子どもが自由に遊びに来ていたり、ただスコールにうたれるだけでも何だか楽しくて、スコールの後の虹を見て、「綺麗だね」って友達とはしゃぐ…好きなものは好きだし、疲れたら休むし、嫌なことは嫌と言う。私は彼らに「人間は本当にシンプルなもので、ありのままそのままのあなたでいいんだよ。」という事を教えてもらったような気がします。

帰り際、こっそりホストファミリーに向け、北スマトラ大学から来てくれた通訳の子に頼んでインドネシア語に訳してもらって手紙を書きました。最後の晩に家族の前で読んだら、ホストマザーが泣いていました。泣くまいと思っていたけれど、思わずもらい泣きしました。帰る日、ホストマザーは私を抱きしめて、私と私の家族の健康を祈ってくれました。私はもう一度泣きそうになりました。

私はボランティアに行った筈なのに、私の助けは彼らに必要だっただろうか…もう十分そこには完成された生活があって、何のために私がいるのかを考えるのが苦しかったです。「誰かのために何かをしてあげよう」という考え方自体が間違っていたのかもしれません。自分が心から楽しんで、そのハッピーな気持ちを周囲の人たちに伝染させるだけでも‘助け’に繋がっているからです。そう、ボランティアの心は特別なものではなく、とてもシンプルな中に生まれるものだったのです。インドネシアに居た12日間、私は心から笑いっぱなしでした。「国際参加プロジェクト」では得たものの方が多すぎて、イ

ンドネシアで出会った方々やプロジェクトの仲間たちへは感謝の気持ちでいっぱいですが、私が楽しんだようにこの楽しい気持ちが、ニアス島の皆さんを始め、このプロジェクトの仲間たちや、私がインドネシアで出会った全ての人たちに伝染して、皆がハッピーな気持ちになっていたなら、私のプロジェクトは成功だったといえるではないでしょうか。

生きていると本気で感じた12日間

新山　由記
（インドネシア語　4年）

「卒業論文の参考にしたい」というのがこのプロジェクトに参加した理由でした。しかし、事前準備は中々順調には進まず、自分に対して苛立ち、何度も投げやりそうになりました。しかし、「絶対成功させたい！」その想いでプロジェクトに望みました。

高鳴る鼓動と、大きな不安を抱え、ニアスに到着。そして、あっという間にモアウォ小学校に到着。「写真で見たよりも、少し狭いかな？」というのが第一印象でした。ホームステイ先のママもすごく優しそうで、家族たちにも歓迎してもらって、不安でいっぱいだった想いが、少し緩和しました。しかし、インドネシア特有のトイレ、水風呂は慣れるまでに時間がかかりました。初日は疲れのせいで早く就寝しました。

次の日は、本番の授業初日。この日は本来なら休日だったようで、生徒は制服ではなく、私服で、人数も少なく、初日の慣れない私たちにとっては不安が残るスタートになってしまいました。生徒は授業中でもお菓子を食べ、平気で教室にゴミを捨て、授業に集中しないというのが初日の感想でした。授業の後の反省会では、今日の反省点を、どのように改善したら良いのかについて相談し合い、改善したい点を現地の先生方に伝え、打ち合わせを入念にしました。

私はインドネシア語を4年専攻していて、他のメンバーよりは話すことができたのですが、やはり普段の会話には慣れておらず、伝えたいことがきちんと伝わらず、ダラダラをした授業になってしまうこともありました。休み時間に生徒と遊んで仲良くなる時、言葉は関係ないと思いました。笑顔で接して、「ヤホブー」と言えば、伝えたいことも自然と伝わり、分からなくてもなんとかなりました。しかし、授業を行なう先生として、言葉ができなければ、子どもたちに私たちの気持ちは伝わらないし、生徒は私たちを先生として見てはくれないので、授業にはなりません。遊びの時間だと勘違いして、ふざけたり、喧嘩をして泣き出す生徒たちも出てきました。そんな時は本当に困りました。1日の授業が終わるたびに反省会をし、改善できるところは最大限まで改善し、最初に日本で考えていたプログラムより大幅に変わってしまったことも多々ありました。毎日毎日、クタクタになるまで声を張り上げ、怒るときは怒り、褒めるところはおもいっきり褒め、なんとか授業に集中させることをしました。最後の授業が近づいてくると、段々と、言っていることを理解してくれ、授業に参加する態度に変化が出て、授業らしくなってきました。この変化は本当に嬉しくて、すでに声が枯れ気味になっていましたが、感動は大きかったです。

残りの授業が少なくなった日、学校が終わり、初めて海を見に行きました。海岸に座り、時が流れるのをゆっくりと見つめていると、日本が恋しくなっていたはずだったのに、日本は時間の流れをゆっくりと感じる時間がないと感じ、ニアスでは、本気で生きているのだと思いました。家へ帰ろうとすると、突然の夕立で、みんなではしゃぎながら雨宿りをし、ニアスの子どもたちとたわいもない話をしたり、一緒に歌を歌ったり、雨が降って、こんなに楽しいと思える時間を過ごしたのは初めてでした。雨が上がると虹が出ていて、日本ではゆっくり虹を見ている暇もなく、久しぶりに見た虹に感動したのを覚えています。家に帰ると、ホストファミリーが優しく迎えてくれ、一緒にテレビを見て笑いあったり、日本の話、ニアスの話などをして、夜を明かしました。ホストファミリーは本当の家族のように接してくれ、普段どおりの私でいれました。

成果発表会の日は猛暑で、バタバタしながらも緊張して、見守ることしかできない自分がいじらしく感じました。発表会は本当にみんなよく頑張っていて、いつもはふざけてばかりいた生徒が緊張しながらも精一杯歌っている様子を見ていると、嬉しさが込み上げてきました。発表会を終えると、ホッとしたのと同時に、寂しさが込み上げてきました。「もっと自分はやれたのではないか」、「別の方法もあったのでは…」と後悔ばかりが頭をめぐりましたが、やはり最後には達成感があり、ニアスで過ごした日々を思い出しました。

ニアスは猛暑で、家に帰るとまず、お昼ご飯を食べ、水浴びをして、2時間程お昼寝。起きると、ニアス散策に出かけました。そして帰るとご飯、水浴びをし、早めに就寝しました。日本では暑い時は冷房、寒いときは暖

房、お腹が空いたら24時間営業のコンビニへ、眠れなかったらテレビを見る、日本では当たり前のようになされている生活です。しかし、ニアスでの生活は、そのすべてができませんでした。というより、する必要がないでした。暑くても関係なく走り回り、お腹いっぱい食べ、思いっきりお昼寝をして、また走り回り、帰ってご飯を食べ、汗を流し、1日の力を一杯一杯使い果たして寝る。毎日が精一杯生きていて、便利な生活は無かったけれど、人間の本能で生きていたと思います。

ニアスで過ごしたのは、短い期間で、私たちは音楽を教えにいったわけですが、逆に、ニアスの方々には、笑顔、優しさ、辛さ、様々なことを教えていただきました。私たちが普段忘れてしまっている、生きることの楽しさ、体で感じる、生きているという感覚、それを感じることができたプロジェクトでした。また、仲間の大切さ、私は誰かに支えてもらっているということを改めて実感しました。

このプロジェクトに携わってくださった沢山の方々に、本当に感謝します。

Terimah kasih banyak!!!!!!!!!!

Some Day.....

武田　晃星
（アジア学科　1年）

約2週間の海外、自分の限界にチャレンジしたつもりだった。でも正直「まだ居られたかもしれない」と日本に帰ってきてからそう思った。

約2週間という長い時間インドネシアの人たちと昼夜を共に暮らした。人生2度目の海外、もちろん今回も言葉と文化の高い壁に異文化コミュニケーションの道を阻まれた。しかし今回は「二度目」・「指さし会話帳」・「今までの人生経験」といった秘密道具で壁に直径10cm程度の穴を作れたが、残りの壁のほとんどをインドネシアの人たちの優しさ笑顔が取り除いてくれた。

ニアスの人たちは僕らが通ると「日本人、見っけ」って感じで「ありがとう!!!」と声をかけてくれる。これが後々しんどくなるのだが、最初のころは心を開くきっかけになったと思う。子どもたちも同じで意味不明なインドネシア語で僕たちに臆せず話しかけてきてくれた。これも心強かった。モアウォ小学校での活動中もそうだった。子どもたちは朝早くから学校に来て僕たちと話しに来たり、何かしら気になるのか、ドアや窓からこっそり覗き込んでいたりした。こんな様子を見ていると少し疲れているメンバーに笑顔がでてきていた。

僕らと何か一つでも関わったニアスの人たちは、よく最後まで（本当のところはよくわからないが）快く面倒を見てくれたり、メンバーと接してくれたと思う。僕は会った人たちに頭が上がらない。それくらい感謝している。だからまだ居れたのかなと思った。

今回の活動では音楽とドッジボールを教えにいったわけだが、インドネシアの小学校もしくはモアウォ小学校だけなのか、なぜ情操教育が取り入れられなかったのだろう…授業中の子どもたちを見ているとすごく楽しそうだったし、何かのルールを守るといった点は少ない人数だと思うが伝わったはずだ。ドッジボールのルールも守ってくれたし、メンバーの呼び声や注意にも耳を傾け聞いてくれた。もちろん聞かなかった子どももいたが、それはそれでメンバーの集中力や次の日の授業の改善策につながった。

あの短い期間で、しかも日本人が教えたのにできていたわけだから、情操教育をこれから長い間モアウォ小学校でやっていけば何かにつながるかもしれない。実際の授業を見たわけではないが多分騒いでそうだから、先生に言われたことを聞くようになって授業態度の向上に役立つかもしれない。

今後、この活動でしてきたことを実際の授業や子どもたちの遊びとして続けていき、日本から運ばれた良い文化として後世に残していってほしい。そしてこれからの「国際参加プロジェクト」も次の世代そのまた次の世代までつながるようなものを日本から持ち込み伝えていってほしい。

インドネシアの夏

橘　優
（ドイツ語　2年）

はじめに、このプロジェクトに参加してたくさんの仲間ができました。そしてインドネシアという国に住む異国の仲間ができました。

長いようで短いプロジェクトの事前研修を終えてイン

ドネシアに出発するときは、「インドネシア語まったくしゃべられへん…」「果たして一人でホームステイして大丈夫なんかな？」とかで不安でした。

そして、インドネシアのメダンに到着しました。日本の空港からは想像もつかないようなぼろぼろの空港に到着しました。空港から出ればもうそこは日本とは似ても似つかないような別世界。車間距離すれすれの車、扉のないワゴン車のようなバスに飛び乗っていく人たち、バイクタクシー、明らかに定員オーバーのバイク。僕の想像を越えていました。一番印象的だったのが、信号待ちのドライバーにインドネシアの小さな国旗を売りに来る子どもたちです。子どもたちは手に大量の国旗を持って、車と車の隙間を通って、それを売っていました。その光景を目にして、「この子どもたちは誰に雇われているのだろうか」、「なぜこんな夜遅くまで働いているのか」と不思議に思うばかりでした。翌日メダン市内の小学校を訪問しました。そこには昨日道端出会った子どもたちとはまったく違った元気で明るい子どもたちで溢れていました。このときインドネシアの貧富の差を思い知らされました。昨日の子どもたちは恐らく小学校にも行けずに働いているんだろうと思いました。

次の日、今回のメインであるニアス島へ向かいました。ニアス島へ向かう飛行機は、映画に出てきそうなくらいの小型機でした。正直ものすごく怖かったです。そして、いよいよニアス島のお宅でホームステイが始まりました。僕がホームステイしたお宅は４人家族でした。ある日、お父さんと薬局に行ったとき、店の前で寝ている貧しそうな男性に薬局に薬を買いに来た人がその男性にお金をあげているところを見ました。それが一番記憶に残っています。そこには、日本で失われつつある助け合いの精神がありました。

ホームステイ先ではいろいろなものを食べさせていただきました。インドネシア名産のドリアンやココナツジュースなどおいしいものばかりでした。現地の言葉で「マンディ」という水浴びも毎日三回しました。参加者の中にはマンディの水が汚いせいか苦手な人もいましたが、個人的にマンディは最高でした。そして何よりインドネシア人と話すのは楽しかったです。インドネシア語以外の言語はまったく通じないので毎晩インドネシア語の単語を覚えました。そして日に日に自分の気持ちを伝えられるようになりました。そのお陰で、モアウォ小学校での毎日のドッジボール指導もスムーズに進むようになりました。

ドッジボール指導では日本の小学生のように名札をつけていないので、どの子が４年生だと学年を見分けるのにとても苦労しました。中には、嘘をつく子どもたちや授業中に乱入してくる子もいて大変でした。そして、ドッジボール指導で一番危惧したことは子どもたちが怪我をすることです。校舎内は綺麗ですがグランドの状態がとても悪く、大きな穴が開いていたり、とがった石がたくさん落ちていました。しかし、子どもたちはそんなこと気にもせずにドッヂボールをするので心配しました。でも、４日間の指導を終えて子どもたちがドッヂボールをする姿を見るととてもうれしかったです。中には、ルールを理解して周りの子に教えてあげたりする子もでてきて、とても驚きました。すべての活動を終えて、インドネシアに限らずもっといろいろな国でこういった活動がしたいと思いました。

人と出会う喜び

中辻　祐介
（欧米学科　１年）

私が「国際参加プロジェクト」に参加した動機は、将来は国際支援を送る国際機関の仕事に就きたいと思っているので、大学在学中にさまざまな国に行っていろんな国の現状を知っておきたかったのと、インドネシアで子どもたちにスポーツ指導したり、ホームステイをすることに興味を持ったからです。

私は、スポーツ班のメンバーとインドネシアの小学校で生徒にドッジボールを教えました。ドッジボール指導は数日に渡って行なったのですが、インドネシアにはドッジボールというスポーツはないので、子どもたちは初め少し戸惑っていました。しかし、ボールを投げたり、キャッチボールをしたり練習していくうちに段々と上手になっていきました。ルールも徐々にしっかりと覚えていきました。指導最終日には、トーナメント戦をしました。すごく盛り上がり、負けたチームはとても悔しそうにしたり、勝ったチームは飛び跳ねたりガッツポーズをして、とても嬉しそうでした。喜怒哀楽を出すほど、真剣にドッジボールをしてくれてとても嬉しかったです。

私はホームステイをする日になってすごくわくわくしてきましたが、ホームステイ先に着いて家に入りホストファミリーに会った時、知っている人がいないこの家で約一週間うまくやっていけるだろうかなど不安が込み上げてきました。でもみんな本当にフレンドリーだったのでその不安もすぐに解決されました。このホームステイ

で学ぶことがたくさんあったと思います。私はインドネシア語を喋ることができなかったので、ジェスチャーや『指差し会話帳』でコミュニケーションをとっていたんですが、それでも十分でした。この経験を通して、仲良くなるのは言葉はいらないけど、日常生活では意思を伝えなければならないことがたくさんあるので言葉は必要だと強く思いました。ホームステイ先で頼みたいことや聞きたいことがあったけど、言葉がわからなくて頼めなかったり聞けなかったことがありました。なので、今度行く時やまた違う国に行く機会があれば、言葉を覚えて行こうと思いました。このプロジェクトに参加していなかったら気づけていなかったと思います。実際に経験しないとわからないことがまだまだたくさんあるので、いろんなことにチャレンジしていきたいと思っています。

このように、「国際参加プロジェクト」に参加してさまざまなことを学ぶことができ、何よりも嬉しいことは日本でもインドネシアでもいろんな人との出会いがあったことです。この「国際参加プロジェクト」に参加していなかったらおそらく出会ってなかった人もいたと思うし、そう思うと人と人とが出会うことは凄いことだと気づかさせられました。私たちがホームステイしたニアス島では、知らない人なのに挨拶をしてくれたり、話しかけてくれて、とてもフレンドリーな人たちだと思いました。日本もこのようなフレンドリーな国になったらいいなと思っています。また、機会があれば私はまた「国際参加プロジェクト」に参加したいと思っています。

インドネシアと日本で見つけたもの

福田　隼
（英米語　２年）

今年の夏、「国際参加プロジェクト（インドネシア）」に関わって、僕は様々な人と出会い、様々なものを見て、聞いて、触れて、日本では決して経験できない、今後の人生に影響するような貴重な経験を数えきれないほどさせてもらった。このプロジェクトを通じて出会った人、学んだこと、経験したことには本当に感謝している。なぜなら、このプロジェクトが狭かった僕の価値観を広げてくれ、自分のすることが正しいことなのか、間違っていることなのかの判断をできるようにしてくれた。そして何より、素敵な仲間と素晴らしい時間を過ごすこともできたのだ。もちろん、僕はまだまだ未熟であるが、このプロジェクトに参加する前よりかは確実に成長したと自覚しているし、このプロジェクトに本当に感謝し、参加できたことを嬉しく思う。

今回のプロジェクトでは、音楽班とスポーツ班にわかれ、僕たちが先生となり、ニアス島のモアウォ小学校で情操教育を教えるのが一番の目的だった。そのため、事前研修では多くの時間を使ってみんなで話し合い、どういった活動をするかなどを具体的に決めた。また現地での活動の際に使用する道具などを作り、後半には時間が不十分なほど作業に追われる日々が続いた。実際の現地での活動ではあまりに予想外なことが起こったり、自分の役割認識の不十分さのせいで混乱したが、子どもたちの素敵な笑顔と周りに人たちの前向きな姿勢に支えられ、なんとか終えることができた。ホームステイでは僕のホームステイ先の家族は５人しかいないのに、連日十数人ほど訪れてくれ、毎晩楽しくギュウギュウ詰めになりながら騒いだりしていた。言葉の面では少し苦労をしたが、現地の人は誰もがフレンドリーで慣れればとても居心地がよく、ニアス島から離れる前夜では皆が集まってくれて、離れるのが寂しいと歌を歌ってくれた。日本との文化の違いに戸惑い、「あり得ない！」と思ったことが何回もあったが、プロジェクトの後半になれば「そういうもの、そういうこともある」と理解できるまでになっていた。今思えば本当にすべてがよかったと笑顔で思える。大げさかも知れないが、こんなに良い時間がもらえて幸せだった。

このように、この「国際参加プロジェクト」でのことにとても感謝している僕だが、実はこのプロジェクトを途中で辞退しようと真剣に思っていたくらいの時期があった。なぜなら参加したての頃は様々な面で忙しく、正直周りの人たちほどこの活動に対して熱くなれず、完璧に冷めていて自分のやるべきことがわからなくなっていたのだ。事前研修のとき撮った写真の、僕の顔を見てもらうとその雰囲気が感じられるはず・・・作業や活動をさぼろうなどとは一切思っていないにせよ、「こんなに冷めている人間が参加していいのだろうか」と悩み、先生方や先輩、友達に相談をした。そんな中、一部の方が「自分のペースでやればいい」、「現地で自分なりの目標を見つければいい」等、たくさんの励ましの言葉をかけてくれ、その言葉のおかげで少し自分のやるべきことがみえてきた。要するに、熱意、自分なりの目標は始めから持たなくていいのだ。周りに迷惑をかけない程度なら、途中から探して見つければそれでいいのかもしれない。

来年も「国際参加プロジェクト」がインドネシアのニアス島で行なわれるなら、僕は参加するつもりだ。いろ

いろ暖かくしてくれた現地の人たちに恩返しをしたい。そして、このような貴重な経験の場を与えてくれたプロジェクト、関係者にもなんらかの形で恩返しをしたい。このプロジェクトは思っていた以上に様々なことでプラスになったと思える。もし、参加を迷っている人がいれば参加をお勧めすると同時に、その人の人生に良い影響があるようにと願う。現地の人たちに僕たちがしたことが伝わったのかは正直不安に思うけれど、僕は本当に良い経験ができて満足している。

私の見た世界

堀崎　明子
（ブラジルポルトガル語　２年）

この「国際参加プロジェクト」を終えて、今までのことを振り返るととても長く、そして同時にいつのまにか終わってしまったという印象です。

ニアス島、モアウォ小学校での音楽指導は、予定を急遽変更しなければならないなど、思うようにいかないことばかりでした。子どもたちは私たちの想像を遥かに超えるほど吸収力がありました。それは日本語の指導までたどり着けるのだろうかという不安を払拭すると同時に、同じ曲の指導を繰り返すことにより退屈と感じさせてしまうという新たな問題へと繋がりました。しかし、現地の先生方、通訳をしてくださった髙藤さんや北スマトラ大学の学生の協力により、最後まで指導を成し遂げることができました。思うようにいかずもどかしい気持ちはたくさんありましたが、振り返れば決して失敗ではなかったと、むしろ成功だったと思える結果でした。音楽指導に携わり嬉しかったことは、登下校のときに近所の子たちが「できるようになった！」と一生懸命私に日本語で歌ってくれたことでした。プロジェクトのメンバーからも「家でも歌ってるよ」と聞いたときは本当に嬉しかったです。こうしてモアウォ小学校の生徒たちやその家族が日本の歌を歌い、関心を示してくれることができ、私たちのプロジェクトは成功といえるものになったと思います。

小学校での音楽指導はとても印象深いものになりましたが、それと同じくらいに印象に残ったことはホームステイでした。ホームステイは初めての体験でただでさえ不安だったのですが、大学生のお姉ちゃんの卒業式に出席するためにお母さんが途中まで不在で不安が募りました。しかし、そんな私の不安を消してくれたのは他の家族でした。姉弟はいつも私たちのどんな些細な質問にも嫌がらず答えてくれ、そして私たちが過ごしやすいようにと配慮してくれました。

私が強くそれを感じたことは、毎日、夕方から晩御飯の前まで玄関の前に皆で座り、お互いの聞きたいことを話し合う時間をつくってくれたことでした。もしかしたらそれは彼らの日常かもしれませんが、私にとってはとても新鮮な体験でした。プロジェクトメンバーが散歩に通れば、その子の話をし、日本の話をすれば日本の家族の話をし…。停電になった夜、会話が途切れたと思ったのはほんの一瞬で、いつの間にかランプの灯りがともされ、何事もなかったかのように会話は続きました。彼らにとって停電は日常のことで不安を感じる必要などなく、それよりも会話を絶やすことの方がとても重大なことのように感じました。

そして私がこのプロジェクトの期間中に１番深く心に残ったことは食事のことでした。海に囲まれた島での彼らの生活は物価が高く、魚を食することが多いものでした。メンバーが「魚ばかりの食事に少し疲れた」という話をしていたことをお母さんと話していたところ、お母さんに「Abo suka ini?（明子はこれが好き？）」とフライドチキンの絵を指差して聞かれ、「suka!!（好き）」と答えました。すると１時間ほどして庭先で妹たちと遊んでいると、両脇に鶏を抱えてお母さんが家の中へと入っていきました。それは多分庭で放し飼いにされていた鶏なのではないのかと思います。その日の夕食にはフライドチキンが出てきました。おそらくそれは、お母さんが抱えていた鶏だと思います。私はインドネシアに着いてからの数日間、食欲が落ちていたのですが、その日は初めてご飯をおかわりし、チキンも２つ食べました。それはチキンがおいしかったということだけでなく、１つの命を頂戴したからには、きちんと食べきらなくてはならないという使命感のようなものがあったからです。別の日に姉弟と食事の話しをしていたときに「ここは島だから魚はすぐに手に入る。安いし、とてもおいしい。お肉はすごく高い」と教えてくれました。他の島から入手しようとすれば肉の値もすごく高くなるのだと思い込んでいたのですが、私たちの思い描く「肉」とはパックに詰められた肉であり、彼らとっての「肉」は庭で飼育している鶏を、いつも目にしている１つの命を食事にするということでした。当たり前ですが、それは私が思い描く肉と比べ物にならないほど高価なものでした。私たちをもてなすために大事な鶏を食事に出してくれたお母さんの気持ち、また肉とは１つの命を頂戴するものであ

るということを再確認し、痛感しました。私が約20年間生きてきた中でこれほど食べ物に感謝したことはありませんでした。

今回のプロジェクトで学んだことは数知れません。時間が経てば忘れていくこともあるかもしれません。しかし、時間が経つことでようやく気づける経験もあるのだと思います。このプロジェクトに参加し、こうしてたくさんの感情を持って帰ってこられたこと、これからの人生にこの体験を持って挑めること、何より先生、メンバー、家族、ニアスの人たち…多くの人たちに支えてもらい、きっとこれからも私の心の支えになってくれるであろうということをとても幸せに思います。本当にありがとうございました。

世界を大きくしたニアス島での7日間

松村　千尋
（ブラジルポルトガル語　2年）

私が今回の「国際参加プロジェクト」に参加したのは、せっかく天理大学に入学したのだから、天理大学でしかできないことをやりたいとずっと思っていたからです。また、東南アジアにはまだ行ったことがなかったので、この活動は私の世界を広げてくれると思い応募しました。

小学校での活動は午前中だけだったので、午後からはほとんどホストファミリーと過ごしました。ホストファミリーはバパッ（お父さん）とイブ（お母さん）、2人のホストブラザーとホストシスターに、下宿生の女の子がいました。ただ、お嫁に行ったお姉さんがいたり、結婚して独立したお兄さんがいるらしいなど、正確なファミリーの人数は最後までわかりませんでした。私にとって幸運だったのは、ホストシスターが英語を話せたことでした。彼女には家族とコミュニケーションをとる時にとても助けてもらいました。彼女は私をバイクの後ろに乗せて、毎日のようにマーケットに連れて行ってくれました。マーケットは人で賑わい、ドリアンの匂いがインドネシアを感じさせました。町は、本当に津波で被害をうけたのだろうかと思うほど復興の様子がうかがえました。復興している町を見た後、ホストファミリーの「あとどれくらいの間、天理大学生はニアス島に来てくれるのか」という質問に、私は答えられないでいました。ニアス島には、これ以上私たちの支援は必要なのだろうかという思いがあったからです。そんなある日、イブが台所の壁にあいた大きな穴を指差しながら「これは地震の時に壁が崩れてあいた穴。直したいけれど、とても費用がかかるから、未だに直せていない。これを写真に撮っておいて」と言いました。それを聞いたときに、外から見ていてもわからない、当事者たちでしか知りえない苦痛があるのだということを感じました。インドネシアへのプロジェクトがいつ終わりを迎えるかはわかりませんが、せめてあの壁の穴がなくなるまでは活動を続けてほしいなぁと個人的に思ってしまいました。

私たち音楽班の活動内容は、2年生・3年生にそれぞれ「大きな栗の木の下で（日本語）」と、「幸せなら手をたたこう（日本語・インドネシア語）」を教えることでした。事前研修でいろいろと準備をしていきましたが、絶対に予定通りにことは運ばないだろうという気持ちをもって活動にあたることにしました。いざニアス島で活動を開始してみると、先生が一緒に教室にいないと子どもたちが静かになってくれない、教室が狭かったため、当初計画していた少人数グループでの指導ができないなど、案の定トラブル続きでした。ただ始めからその事態を予測していたこともあってか、状況に応じてそのつど対応することができました。最後の成果発表会では、暑い中、子どもたちが一生懸命歌ってくれて、本当に感動しました。

ニアス島での私個人の目標は、「絶対に倒れない」というものでした。小学校での活動に穴を開けるのは嫌でしたし、2度と経験できないような貴重な1週間をベッドの中で過ごすということが自分の中で許せなかったのです。その目標を達成するために私が努めたことは、とにかく食べるということでした。食事に出されたものは何でも食べたので、インドネシアに来る前は辛い食べ物がすごく苦手でしたが、この1週間でそれを克服することができました。その努力があってか、ニアス島での活動期間中、体調を崩すことなく見事目標を達成することができました。体重も増加するという事態にもなってしまいましたが…。私のホストファミリーはとても温かく、愛に溢れた家族でした。活動期間中、ずっと私を支えてくれ、何よりも私のことを最優先に考えてくれました。「来年も天理大学生がニアスに来たときはまたホストファミリーをしたい」と言ってくれた時は本当に嬉しかったです。

今回の「国際参加プロジェクト」に参加する中で、事前研修期間も含め、いろいろな事がありました。その出来事の全てが私を成長させ、また、自分自身を見つめなおす機会を与えてくれました。ニアス島の小学校での活

動や、ホームステイの経験は、私の世界を大きくしました。このプロジェクトに参加して、本当に良かったと思っています。天理大学生である間に、機会があればまたぜひ参加したいです。

伝えたかったこと、学んだこと

山口　大輝
（欧米学科　1年）

３食たべることができない、清潔な水を飲むこともできない。そんな人たちが世界にたくさんいることを知って、そのような人たちが良い暮らしができるようにお手伝いがしたい、海外でボランティアしたいと思うようになりました。しかし、実際には海外に行ったこともないし、貧しい地域の生活などはテレビやパソコンでしか見たことがありません。天理大学に入学してすぐに「国際参加プロジェクト」の存在を知り、絶対に参加しようと決めました。活動内容は私が考えていたようなものではありませんでしたが、一回生のうちに国際協力というものを経験しておいて、これから４年間何をすれば良いのかを明確にしたかったのです。

自分にいったい何ができるのかと不安でしたが、思っていた通り！何もできませんでした。正直なところ先輩方についていっただけではないだろうかと思います。事前研修で準備をしているときも、先輩方の意見やアイデアに感心するばかりで、自分で思いついたことなど本当に大して役に立つものでなく、力不足だなぁと実感しました。そんな先輩方と議論を交わしたり、話を聞くだけでもすごく勉強になり、これだけでもプロジェクトに参加してよかったなぁと思いました。

そして事前研修も終わり、いよいよ現地での本番の日を迎えました。私は「準備体操」と「ボールの投げ方・捕り方・避け方」の指導を担当しました。子どもたちの学習能力はすばらしく、私の担当したところはもちろん「キャッチボール」や「的当て」なども回を重ねるごとにどんどん上達するので驚きました。私たちがインドネシア語を十分に覚えていなかったため、指導するのに時間がかかったり完璧に伝えられなかったこともあったと思いますが、練習の内容自体はスムーズに進行したと思います。

指導する中で最も手間取ってしまったのは「整列」と「班分け」です。色の付いたガムテープを使って班分けをしたのですが、子どもたちは自分の好きな色の班になりたがり、上手くまとめることができませんでした。なぜこの２つはスムーズにいかなかったのかと自分なりに考えて思ったことは、最初に「体育の授業」というものを伝えきれていなかったことに原因があったのではないかと思います。色で班を分けるなどの子どもたちが楽しく学べるようにと考えたことが「これは授業じゃなくて遊びだ」と思わせてしまったのかもしれません。屋外でボールを使ってスポーツをすることも授業だということを理解していれば、整列や班分けももっとスムーズにできたと思います。

手際が悪かったところもありましたが、ある程度教えると子どもたちは自分で学び取っていったように感じました。ドッチボールを通じてみんなが１つになっていくのも目に見えて分かりました。試合で勝ったときはみんなで喜び、負けたときはみんなで悔しがる。この光景を見たとき細かいルールなどよりも一番大切で教えたかったことが伝わったんだと思い嬉しかったです。

今回のプロジェクトでは、人に何かを教える難しさと、複数の人で企画を作り上げ協力して進行させる難しさを学びました。将来海外でボランティア活動するためには語学力だけでなく、もっと考える力を養わなければならないと思いました。これから４年間の内に、このような機会があればどんどん参加して、このプロジェクトで出会った先輩方のように自分で考え、行動できるようになりたいです。

～プロジェクト関連資料～

◎参加を呼びかけるパンフレット

天理大学　地域文化研究センター（ICRS）

第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」

参加者募集

参加募集説明会開催

●事前予備登録説明会

4月2日（水）　13：30～14：20

会場：杣之内キャンパス　２号棟　22B 教室

●募集説明会

4月14日（月）16：30～17：30

会場：杣之内キャンパス　南棟　32A 教室

Q1：「国際参加プロジェクトとは」？

「国際参加プロジェクト」とは天理大学の「建学の精神」の１つである「他者への献身」を国際的なフィールドにおいて実践していく教育プロジェクトです。2002 年より天理大学地域文化研究センターが所管し、全学的な活動プロジェクトとなっています。プロジェクトそのものは 2001 年の夏から始まり、これまでインド（2001 ～ 2003）、フィリピン（2004、2006 ～ 2007）、中国（2005）、インドネシア（2006 ～ 2007）で行ない、延べ 111 名の学生が参加しています。

＊天理大学の学生であれば、学部・学年を問わずに、誰でも応募・参加できます !!!

Q2：なぜ、インドネシアなのか？

「国際参加プロジェクト（インドネシア）」の舞台であるインドネシアは日本同様に地震の多い国です。特に、2004 年 12 月に起こったスマトラ沖大地震はかつてない津波・地震の被害をもたらしています。その際、天理大学は国際文化学部アジア学科の教員・学生を中心に、募金活動を行い、被災地の１つである北スマトラ州ニアス島のモアウォ小学校に校舎を寄贈しました。現地では、まだ様々な支援の手を必要としていますが。本プロジェクトでは、モアウォ小学校周辺の地域コミュニティと交流しつつ、防災教育などを行ってきました。

Q3：どのようなことを経験できるの？

「現地での生活・交流を通して、衣食住など様々な面で日本とは違う世界を感じた。トイレットペーパーのないトイレ、濁った水の風呂、十分に言葉の通じないホストファミリー。そんな日本の生活にはない満たされない生活。しかし、そのような生活の中で、私は不満よりも満足感でいっぱいになることができた。なぜなら、最近の日本人が忘れている大切なモノがあったからである。それは、優しく情の深いホストファミリーの愛情であったり、太陽のような子ども達の笑顔であった。」（イスパニア語２回男子学生）

「人間の幸せって一体何だろう、と考えさせられました。私はここで、物がありふれていることをあたりまえに思ってはいけないのだとすごく気づかされました。そして、何事もありがたいと感じながら日本で生活していこうと改めて感じました。」（英米語２回女子学生）

「インドネシアへ行って『世界は広いな』と改めて思い知らされた気がします。今までも世界が広いなんてことは知っているつもりでいました。でも私が思っているよりも、もっと世界は広くて、知らないことがあふれているのだと思いました。例えば、訪問した大学で日本語を専攻している男子学生と話した時『私は日本の静岡の大学に留学したいです。静岡はどんなところですか』と聞かれました。私は『お茶の産地として有名で、富士山があります』などの簡単なことしか答えることができませんでした。世界を知ることも大切だけど、まずは自分の住む日本のことももっと理解したいなと思います。」（アジア学科１回女子学生）

あなたも国際ボランティアに挑戦してみませんか？

第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」概要

1．場所：インドネシア共和国　北スマトラ州メダン市周辺・ニアス島
2．実施期間：2008 年 7 月 27 日（日）～ 8 月 7 日（木）
3．費用：10 万円＋航費 1 万円程度（ビザ代・海外旅行傷害保険代を除く）
　＊その他の費用については補助金などでまかなわれます。
4．募集人員：15 名程度
5．活動内容予定
　ニアス島（8 泊 9 日）　モアウォ小学校で、ボールを使用したスポーツ指導
　　歌を中心とする音楽指導　など
　メダン市周辺　日本政府による開発援助の現場の見学
　　北スマトラ大学での学生間交流

● 参加の流れ

STEP I 応募・選考

1．参加を申し込みます。
・募集〆切：4 月 21 日（月）午後 5 時
　「申込書」を教育支援部へ提出
・選考：書類選考と面接選考を実施

STEP II 事前研修！

2．現地活動の準備をします。
・毎週水曜日の 5 限（16：30 ～）
　4 月 30 日～ 7 月 9 日まで
・土曜日研修　5 月 10 日と 6 月 7 日を予定

STEP III 現地活動 !!

3．インドネシアで活動します。
・スケジュールの予定
　7 月 27 日（日）日本出発
　8 月 7 日（木）　帰国

STEP IV 事後研修 !!!

4．活動の成果をまとめ、報告します。
・参加レポートの提出
・報告書の作成など

● 応募方法

＊「募集要項・申込書」を入手し、「申込書」に必要事項を記入の上、4 月 21 日（月）午後 5 時必着で、教育支援部（研究棟１Ｆ）に提出してください。

＊「募集要項・申込書」配布先：教育支援部・地域文化研究センター共同研究室（研究棟４階）
体育学部：近藤研究室、田里研究室

＊＊＊留意事項：活動予定地の都合により、プログラムの内容等に変更が生じることがあります＊＊＊

■ 問い合わせ先 ■

天理大学
地域文化研究センター（研究棟４Ｆ東側）

TEL 0743-63-9077

E-mail: icrs@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/ja/center/icrs/index.html

◎日本インドネシア友好年事業関連

第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」は日本政府が主催している日本とインドネシアの国交 50 周年を記念した事業「日本インドネシア友好年事業」に認定されました。プロジェクトでは国交 50 周年を記念して、ニアス島で配布するドッジボールと音楽指導の教材の裏表紙および学生たちが身につける缶バッチを、友好年のロゴを入れて作成しました。

『ドッジボール教則本』

『音楽指導教則本』

『友好年＆プロジェクトの缶バッチ』

◎新聞記事等

第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」に関する記事が掲載された新聞・雑誌等は以下の通りです。

'Kesan Bail dari Masyarakat, Mahasiswa Tenri University Jepang Akan Kembali Kunjungi Nias', "Harisan Analisa 紙", 2008 年 6 月 21 日.

'Mahasiswa Tenri University Jepang Kunjungi Analisa, Terkesan Pada Keramahan Penduduk　Nias', "Harisan Analisa 紙", 2008 年 8 月 6 日.

「山本教授と天理大学生ら 31 人　ニアスの小学生と交流」,『じゃかるた新聞』2008 年 8 月 26 日.

「国交 50 周年「友好事業」に認定」,『天理時報』第 4094 号, 2008 年 8 月 31 日.

「インドネシアでのボランティア活動報告ー現地の衣装（バテック）を身につけて」,『布留からの発信ーまことの信条教育を目指してー』（天理小学校), No.68, 2008 年 9 月 29 日.

「国際参加プロジェクトが日印の友好年事業」,『はばたき（天理大学広報誌)』, No. 5, 2008 年 10 月 20 日.

「日本インドネシア友好年事業に認定」,『学報天理』, 第 23 号, 2008 年 10 月 26 日.

アナリサ紙を訪問し、活動を報告した４年生の学生たちは編集長と一緒に記念撮影をしました。
そのときの記事が右頁のように現地で掲載されました。

Mahasiswa Tenri University Jepang Kunjungi Analisa

Terkesan pada Keramahan Penduduk Nias

Medan, (Analisa)

Mahasiswa Tenri University, Nara, Jepang, mengaku terkesan pada keramahan dan senyuman penduduk Nias selama mereka berada di pulau ini dalam rangkaian kegiatan proyek partisipasi internasional universitas ini, 29 Juli-4 Agustus 2008.

"Mereka ramah terhadap sesama. Mereka selalu memberikan senyuman kepada kami," kata Kazuki, salah satu mahasiswa peserta program ini saat berkunjung ke kantor Harian *Analisa*, Medan, dan diterima Pemimpin Redaksi (Pemred), H Soffyan.

Selain mahasiswa, turut dalam rombongan Tenri University adalah dosen pendamping, yakni Prof Dr Yamamoto Haruki, Prof Noriya Sumihara PhD, dan Minako Kuramitsu.

Dalam kunjungan yang berlangsung hangat dan akrab itu, Pemred Soffyan lebih banyak menanyakan tentang kesan-kesan yang diperoleh mahasiswa selama berada di Nias dan tinggal di rumah warga setempat.

Yuki, mahasiswi yang mempelajari bahasa Indonesia di universitasnya, mengakui akan keramahan masyarakat Nias.

Dampak positif lain yang langsung dirasakannya adalah perbendaharaan kata-kata bahasa Indonesia. "Kosakata bahasa Indonesia saya bertambah selama tinggal dan berinteraksi dengan masyarakat Nias," ungkapnya.

Namun, menurut Kazuki, ada hal yang sering membuatnya terkejut, yakni padamnya aliran listrik secara tiba-tiba.

Meski demikian, baik Kazuki dan Yuki mengaku tetap ingin datang ke Indonesia lagi. Apalagi, mereka sudah terpikat dengan masakan khas Indonesia. Kazuki mengaku menyukai nasi goreng, sementara Yuki sangat menikmati ayam goreng.

Berbagai kegiatan

Menurut Yamamoto, salah satu latar belakang Tenri University melaksanakan kegiatan proyek partisipasi internasional/ICRS di Pulau Nias ini adalah terkait bencana gempa bumi yang menimpa pulau itu, beberapa tahun lalu.

Di Nias, para mahasiswa ini menggelar berbagai kegiatan di Sekolah Dasar (SD) Moawo, GunungSitoli, yang dibangun dari sumbangan mahasiswa Tenri University, dan masyarakat Jepang.

Menurut Yamamoto, pengumpulan dana sumbangan itu dilakukan langsung oleh mahasiswa Tenri University di berbagai tempat dan berlangsung hampir setahun lamanya.

"Dia juga ikut langsung mengumpulkan sumbangan dari masyarakat," kata Yamamoto menunjuk Yuki.

Di antara kegiatan yang dilaksanakan dengan melibatkan murid SD Moawo, tersebut ialah pelajaran bermain *dodge ball* (permainan bola khas Jepang), bermain musik (pianika) dan bernyanyi, dan ceramah pendidikan yang disampaikan oleh Yamamoto Haruki.

Ceramah pendidikan yang disampaikan Yamamoto Haruki tentang "Sikap Orang Jepang terhadap Pendidikan dan Peranan Pendidikan dalam Masyarakat Jepang".

Sebelumnya Noriya Sumihara menjelaskan, program kegiatan proyek partisipasi internasional/ICRS Tenri University sudah dimulai sejak 2001. Selain di Nias, Indonesia, proyek sama juga sudah pernah dilangsungkan di Gujarat (India) dan Manila (Filipina).

Peserta proyek partisipasi internasional universitas ini di Nias, yakni sebanyak 18 mahasiswa berasal dari empat departemen atau seluruh departemen yang ada di universitas ini.

Untuk pembiayaan program ini, menurut Noriya, sebagian dibantu pemerintah, sebagian universitas dan mahasiswa sendiri. (gas)

＊"Harisan Analisa 紙" 2008 年 8 月 6 日より抜粋

天理大学「国際参加プロジェクト」
『第９回「国際参加プロジェクト（インドネシア）」報告書』

発行：2009 年 1 月 26 日

編集：倉光　ミナ子（地域文化研究センター）
写真編集：石田　賢人（イスパニア語２年）

発行所：天理大学地域文化研究センター
〒 632-8510　天理市杣之内町 1050
Tel/Fax: 0743(63)9077

印刷所：株式会社　春日

＊天理大学地域文化研究センターの許可なく、転載・複製することを禁じます。

ICRS
Tenri Univ.